信ちゃんの昔話　第八部

戦争と移民

沼田信一

序

パラナ日伯文化連合会
会長　嶋　田　功

二十一世紀の初めの新年を、皆様と共に希望と期待に滴ちて、その第一歩を力強く踏み出す事の出来ました事を、心よりうれしく思う者でございます。

私は先輩として、心より尊敬している沼田信一氏より「戦争と移民」の発刊を祝して一筆を、と依頼されて感激している者です。

昔話の第一部では、神戸港を出帆して、見ず知らずの地ブラジル固に到着以来の苦労と、感激と、人生航路の長旅を、やさしく面白く書き続けて、特に第二部「ピンガと移民」では、ピンガ（酒）の力でまぎらわす望郷の念、貧乏から立ち上がる移民の生活を、せきららに書きながら、面白く読まされたのには心をうたれた。

それからの続編も、移民とは切っても切れない行程で、九十年の姿と歴史を書き綴って下さっています。

今度の第八部は、二十世紀には切っても、切り離す事の出来ない「戦争と移民」と云う題なので、私も期待して楽しみに出版を待っているのです。

苦労を重ねて過した歳月にも、やや生活の安定を見い出した多くの移民達も、戦争という国策の為に、言葉では表

せない程の苦しみを味合った方々の体験を、書物に書き残して下されば、世代が変っても、三世、四世の方達にも、先輩移民の苦楽を知る事が、出来ると信じて「信ちゃんの昔話」に感激を覚える者であります。

私たちパラナ日伯文化連合会では、移民の歴史を色々な形で、後世に残し、尚も日本人の誇りを残したく、二十一世紀始めの事業として、パラナ州ローランジャ市に持っている、いわば「日本移民公園」に、既に持っている移民資料館の改造、増築に取り組んでいるのですが、その中の第一人者として、八十三歳の高齢にもかかわらず、沼田信一氏（信ちゃん）は、日夜一生懸命に全力投入にして下さっている一世移民の尊い一人であります。

信ちゃんの昔話は、日本でも多勢の方々に読まれていると聞いています。私の義母は九十三歳で健在ですが、大変な信ちゃんのファンで、今回の訪日には、移民の生活を、日本語学校での教育用にと作られた「教育かるた」を持参して大変に喜んで貰いました。

「教育かるた」は、アリアンサのロンドリーナ・モデル校で分けてもらえます。

「信ちゃんの昔話」の第一部が発刊された時は、十部ぐらい書き続けてほしいと願った一人でしたが、今では十部も目前になりました。こうした面白い本は、健康に気を付けていつまでも書いて下さる事を願う一人です。

沼田信一氏はパラナ日伯文化連合会教育委員長、同連合会相談役、並びに此の度は、ローランジャ移民資料館増改

築の副委員長として、公私共に常に日系社会の為にご活躍されておられます。
今後も健康に充分留意されまして、うつり行く移民の姿を書き続けて下さい。

面白い　ー　珍しい　信ちゃんの昔話

ブラジル・モラロジー協会理事長
モジ市イピランガ病院院長
森　昇

沼田君が、近く八冊目の「信ちゃんの音話」を刊行されるので、又私に序文をと、言われて驚いている。
私たちは一本の手紙を書くのも大儀で、チョット電話ですまして、なかなか書くと言う事をしないでいる時、今年は八十三歳になるかと思われる沼田君が、五年程前から書き出した昔話を早くも八冊目を出されるという。
一冊目を出した時、小さい字で表紙に第一部と書いてあるので、次々と出すつもりですかと尋ねると、「さあーどうなるでしょうか」と、言われていたが、第二部「ピンガと移民」、第三部「毒蛇と移民」、第四部「ムダンサと移民」と、次々に刊行されて来て驚いている。
一冊三十話ほどの短編で書かれているが、手にすると、

もう一編、もう一編と、一晩の内に読まさってしまう、大変に魅力を持っている本です。どなたも一読下さいます様おすすめ致します。今回は「戦争と移民」と言う事で私も楽しみにして居ります。

尚　氏は、私達の協会の副理事長を長く勤め、パラナ州では、パラナ日伯文化連合会の日本語教育委員長として、連合会が経営するモデル校の責任者でもあります。

信ちゃんの昔話　第八部の刊行を祝って

パラナ目伯文化連合会　名誉会長
福　島　正　登

二十世紀の終りの二〇〇〇年も無事に終り、二十一世紀は躍進の年といわれ、今年こそはと、希望に満ちた気持ちで新年を迎えられた事と思います。

沼田氏の昔話が、八部を出版されるに当り一言お祝いを申し上げます。

特に「戦争と移民」は、移民には忘れる事の出来ない思い出であります。

戦争の為、我々は日本の敵国であるブラジルにあり、平時日本人に使われているブラジル人が、此の時こそと、威張るので困った事が度々あったが、私達の地方では、それ程でなかったが、終戦後日本人同志の争いが全国に広が

り、各地方で日系人同志が勝った負けたと争い、暗殺事件が起り、祖国より船が迎えに来るというので、土地や家を売り払って町に出て、船を待てども船は来ず、有金は全部使い果して、元居た家には帰れず困った人が多勢おられる。

日本人会でも勝ち組と負け組が別れて何年も過したが、大きな損害であった。

中には親族が、勝ち組、負け組と分れて、絶縁した人達も多く居て困った事であった。

此の様な事件も、時代が変り二世の社会となった今では思い出す人も少なくなっているのではないだろうか。

私は終戦頃は青年時代であって、日本が負けた、負けたと、云はれれば、おこりたくなる事もあった。

日本移民は出稼ぎで、十年もしたら帰ってくると約束して出て来たものであるが、子供は成長してくるし、仲々日本には帰られないと考えなおしてから、子供をブラジル学校に進学させる様になったのであった。

日本人が一面でおくれたのも戦争のためであった。「戦争と移民」は、移民にとっては、思い出深いものであります。

沼田氏が八十歳を越していて、幾つもの役をされ、その中で次々と面白い移民史の発行、どうか健康に気をつけられながら、活躍されん事を祈りまして、私の第八部「戦争と移民」の発刊へのお祝いの言葉と致します。

序

沼田信一

昨二〇〇〇年の半ば頃に出したいと、思っていた第八部が、何かと雑用に追われたのと、或る問題には、年月に思い違いがあった事が気になり、ついつい遅れてしまった。

然しまた、私の本には約束はないので遅れてどうこうと言う事はないのですが、私が結婚して還暦、結婚還暦」と言う言葉を聞いた事はないが、此の七月が来ると、私は八十三歳、妻は八十二歳に近くなり、結婚六十年になりますので、やや健康そうにしていますが、いつ終りが来るかわかりませんから、急いで予定の第十部迄を出してしめくくって置きたいと考えている次第です。

この八部の「戦争と移民」で思う事は、移民は直接戦争の被害は受けず、ブラジルが、日本に宣戦布告をしても、何事もなければ、知らずに過ごされたのであったが、終戦と同時に勝ち組なるものが現れて、日本は負けないと信じた者と、だまして金儲けをたくらんだ者がいて、相当長い間日本人同志で気まずい思いをして暮す時期があったので、移民史には欠かせない事件であった。勝ち組の為に命を落とした人も二十名前後はいたのであるから大事件であったので記録に残すべき事柄である、と思って書いた。

従って記録に残すには、正確さも必要と思って、半田知雄先生の著書のお世話になりました。

此の本大変参考になる事が多いので、私の本を読んで下さる方は一冊座右に置かれる様におすすめ致します。

（書名）

「ブラジルく日本移民・日系社会史年表」半田知雄編著

改訂増補版

尚、又、私の本の表紙から、挿絵をかいて下さっていた、牛窪清四郎氏が亡くなられて、私も全く落胆している次第ですが、私の昔話十編までは、よく画いて下さっておりましたので、楽しんで頂ける事と思います。

牛窪さん、長い間たのしまさせて頂いてどうも有り難う。安らかにお休み下さい。

目次

序……嶋田　功
面白い珍しい　信ちゃんの昔話……　森　昇
信ちゃんの昔話　第八部の刊行を祝って…福島　正登
序……　沼田　信一

第一話　戦争と移民　11
第二話　軍事教練　16
第三話　機関紙　…　22
第四話　北パラナの勝組　25
第五話　消えた剣道大会…　28
第六話　勝ち組にだまされる　31
第七話　戦時中の燈火　…　35
第八話　帰国準備を急ぐ　38
第九話　臣道連盟事件　42
第十話　日本戦災同胞敢援会…　47
第十一話　戦争当時の記録ところどころ　50
第十二話　勝組事件のあらまし　59
第十三話　夜警団　……　71
第十四話　不思議・…　74
第十五話　つかれる　77
第十六話　無理は一時の得　81

第十七話　鯉が釣れた……　８５
第十八話　知らないものは　８７
第十九話　能　力　……　９０
第二十話　大木に挑んで…　９３
第二十一話　農　薬　……　９７
第二十二話　隊　商　１００
第二十三話　昔の訪日　１０３
第二十四話　ＡＣＥＬのカンポ地ならし　１０６
第二十五話　南米への航海……　１１０
第二十六話　〃おとぎ話の国〃造り　１１５
後書き　……　１２２

第一話　戦争と移民

ブラジルの移民達に、一番悪影響を与えた物は、と言えばそれは太平洋戦争という事になるかも知れない。

それも自分達同志の意見が分かれての、勝ち組による二十名前後迄数えたのであろう、暗殺事件が第一にあげられるかも知れない。

然し実際には、デマニュースに振り廻されて、家業に手がつかず、右往左往して、それ迄に築いていた財産や地位を失い、子供の教育も不充分な育て方をしてしまった家族がどれ程有ったかという事を考えたい。

農村に居て引き揚げがおくれては大変と、畠を現金にし

て町に出て来て借家住い。来週か、来週かと日本からの船を待っていたＡ氏が後悔するに、あの時、私は借りた家を三軒買える資金を持っていたのを無くしたので、妻にいつ迄も悔やまれるが、私もつまらない事をしてしまったと申し訳なく思っているのですが、結局、私の代は棒に振ってしまった。という。

人の話ではＢは、良いコーヒー園を持っていたのであるが、同志の滞在中の世話から軍装を整備するのに収穫を使って、落ち着いた時には、手人れしなかったコーヒー園では生活できず、これを手離して町に出て来たが、何か賃仕事を捜して生活をしなければならない状態だったという。

Ｃ氏は真面目な農家で、子福者であったが、その子供たちに恋愛相手が出て来ると、ブラジルでは絶対結婚させん、来月は帰国するのだから、「お前らの結婚は日本に帰ってからだーー」と、来月、来月と云っている内に自殺する者、逃げ出す者で破滅してしまった。

こうした話は何も私の近くだけの事ではないのである。サンパウロ郊外のシッポー村に集まった人達だけでも大勢居たとの噂であった。

又、ロンドリーナから第一便で帰国するとて、パラナグア港に、二、三家族が鉄道駅で同志に「万歳、万歳」で送られて出かけた者がいる。

どうしてもサントス港に来るのが早かろうと、サントスに出かけて行った家族も居た。

戦勝ニュースには、勝ち組の中にこうした犠牲者が大変に多い事を知るべきである。なにも負け組に対立しただけではなかったのである。

日本語教育の停止、日本語新聞の発行停止、日本人同志の集会の禁止、敵国人資産凍結令、旅行制限等々幾つもの圧迫は有ったものの、実際にはそれ程、どうにもならない不安に押し込められた訳ではなかった。

それは、日米交渉に野村駐米大使が行詰まると、日本政府は栗栖特派大使を送り込んでの交渉になったが、それも外交では交渉成立せず、いよいよ開戦となると、若い者は戦争になれば、満州・支那の問題も、日米間題も短期決戦で、日本の勝利で片付くものと考えていたので、何が起きようと、一時の辛抱だと思って、活字に書かれる程に大きな不安に落とされたのではなかった。

特殊な間題として、サンパウロ市の中心地帯からの立ちのきとか、海岸地帯に住んで居た人達の短時間内での内陸移動命令で大変な被害を受けたわけであるが、地方では真面目に働いている分には何程も、被害らしいものは受けなかったのである。

資産凍結令にしても大事業家には制庄される事はあったらしいものの、一般農家には不動産を売却してはいかん、買うのは自由という事であったので、私は二ケ所程拡張したが、一般日本人は帰国する事を考えていて拡張する人は少なかった。

以上のような事で戦争中、亦戦後の勝ち組、負け組の時代でも、ブラジル人側から危険を感ずる様な事は、殆どなかったと言いたい。

却って此の頃の不景気で泥棒が増えて、各窓に鉄格子をはめ、それぞれの家の表のムーロ（塀）が次第に高くなって来ている事に嫌な、又日本から来る人々に少し恥ずかしい気持にさせられているこの頃の事である。

全く悪人が自由に道を歩き、まじめな市民が檻の中に暮らしている様な姿である。それも幾つもの鍵を持って開け、閉めしての事であるから情けない。

戦時中も、戦後の勝ち負けの時代にも、この様な不安は無かったのである。

本国では、何百万の命の犠牲を払い、それに輪をかけた負傷者を出し、国土を空爆に晒らして戦って居る時に、家族揃って安閑として自分の仕事に専念して居れた我々としては言える事ではないが、長びいた戦争が日本の敗戦となって終った為に、母国は急いで帰る事の出来ない国になったという淋しさであった。

そこへ、育って来た二世は、日本語の教育が禁止されていた為に、ブラジル語の教育を主に育って来ていたので、日本が負けた以上、我々は何時帰国するかというより、此の国に落ち着く事を考えなければならない事を悟り、子供はそのまま、ブラジルの教育を続ける事になったのが一般の実情であろう。

その証拠が、一世の苦しい生活の中から、誠に沢山の教育を受けた二世が育って来ているのである。

移民の連れて来た子供は、労働力として教育という面では犠牲にした家が多く、それが、二世では全員大学卒という家庭が続出したのであった。

然し又、その陰で案外に早く、子供は都会に出てブラジル語、学費を仕送りした田舎の日本人植民地の親は日本語で用が足りて、親子で話の通じないという悲しい状態も生まれて来たのであった。

更に、母国に帰られない事になったのと、子供らの教育がブラジル学校主体になったので、何も日本人の植民地に無理に居る必要はないと、あれよ、あれよと思う間に広いブラジルの隅々まで、散らばって行くのであった。

今では、何所へ行っても邦人の居ない町など無いと言いたい程、日本人は全国に散らばったのである。

然し敗戦した母国が、案外早く経済復興してくれたので、あの時、早急に日本人の多い社会から離れて行った人達の中には、後悔している人も居る事であろう。

こうしてあの戦争は色々な波紋を生じたので、私は此の八冊目を「戦争と移民」と題して、戦争前後に私の周囲に起きた事を幾つか思いつくままに書いて見ようと思うもので、ご一読頂ければ幸いです。

第二話　軍事教練

終戦後戦勝ニュースが入ってきたのは終戦を待っていた様に早かった。

私達は電気商の西氏のお世話で、かくれてラジオを開いていたので、二ユーギニアのポルト・モレスピー軍港攻略が時間の問題で陥落するとの大本常発表があって、毎晩期待して聞いていた。

私達は隣りの石川さんのカフェーの乾燥倉庫の狭くるし

い処を這い登った天井裏で聞いていた。或る人は畠の中の休み小屋に穴を掘って聞いている人もいた。

このラジオは当番制で聞いた主なニュースを仲間に廻していた。仲間は十数人居るとの事であったが、西氏の統制で、ラジオを届けてくれる人と届ける人、即ち各自の両側の人を知らされている位で仲間で集まるという事はなかった。聞いた二ユースも一方の人に渡せば良い事になっていた。

さて、時間の問題と発表のあった、ポルト・モレスピー軍港の陥落が、今日か、今日かと、期待して上りにくい倉庫の天井裏にあがってラジオにかじりつくのであるが、その内に、占領したニュースの無いまま、この軍港のニュースは消えてしまった。

何とも此の軍港の攻略が気になるので、私達に所有地の半分余りを切り売りしてくれた隣のコーヒー園主の英国人の所へなにげなく、遊びに来た様なかっこうで、さぐりに行くと、此の人も此の軍港の戦いが気になっていたのであろう、早速、

「オオ、沼田さん、モレスピー軍港はもう陥落しない。日本軍はどんどんと退却しているので、これで近い内日本は負ける……」

と言われたので心配していた。

その頃は戦争の事が心配になるので大本営のニュースのほかに、ブラジルの新聞のニュースも知りたいので度々町迄出ていた。

と、一日その時は分耕地に来ていたのでラジオのニュースに接して居なかったので、いつもお世話になる町の商店に立ち傍ると、御主人が

「沼田さん戦争は昨日、日本が降伏した。広島と長崎にとてつもない破壊力のある爆弾が投下されて、陛下が決断なされた様だ。ちょうどニュースの時間だから中に入ってラジオを聞きましょう」

と誘われたので応接間に入ると、私たちは禁止されているラジオをかくれて聞いているのに、此処の家では応接間で聞いているので、ちょっと驚かされた。

主人がスイッチを入れると間も無く陛下の玉音放送が入って来て驚いた時の事は忘れられない。

そこで主人が言われた事は、

「テーブルの上のコップに水を入れて置いて、誰も家の人がさわらなければ、撒かれない、と言ってみても、猫があがってひつくりかえせば、水はまかれるのと同じで、「日本は戦争に負けない」といっていても、負ける時が来れば負けるのでしかたの無いものだ。唯私たちは、勝っても負けても生きてゆかなければならないのですから、落ちついて仕事をしていなさい」

と注意されて帰宅し、草取りに追われていた。

それから一週間もしたかと思う頃、その日も除草をしていたところへお隣の軍人上りの福治さんが来られて、

「沼田さんお目出とう、日本が戦争に勝ったよ、さあお祝いだ。今夜はみんな集まって一杯飲もうよ」

と連絡に来てくれたのではあるが、先日の事があるので、
「福治さん、そうは言っても、その話少しおかしいよ、私は直接終戦の勅語を聞いているので、とても勝っているとは思えないよ」
と言えば、
「いやあ、敵艦隊を日本近海に集合させて、それを一挙にたたきつぶして全滅させたんだ、さあ、今夜はお祝いだ、お祝いだ」
と言って尚知人へ達絡に出かけられた。
私はでたらめと思いながらも、万一という事もあるかと思って、町の先輩に伺いに自転車で出かけた。
先輩は、落ちついて、
「そんな話は市内にも伝わっている様だが、日本のラジオも、当地の新聞も同じ日本の敗戦を伝えているので、日本が勝っている事はないが、我々は勝っても負けても働かなければならないのだから、ニュースに迷わされずに仕事をしていなさい」
と再び注意を受けて帰った。
帰宅してみると、隣から戦勝祝いの通知が来ていなくて良かったと思った。
とに角ロンドリーナの場合、戦勝ニュースは終戦後二週間目頃には出廻っていた様である。
まったく驚ろく程の敏捷さであった。
その内にバストスの溝部氏の暗殺を皮切りに、ノロエス

テ線方面から、サンパウロ市内に勝組テロの暗殺事件がエスカレートして行ったのであったが、当北パラナ地方では戦勝ニュースだけで、暗殺事件は起きなかったので誠に幸いであった。

然し起る素地は十分に出来ていたと思われのである。

その一つはチバヂー河畔の森林の中で軍事教練が行われた事実から考えられる。

二、三十人は集まったものであろう。軍服、軍帽、銃は全て剣付で何十丁と準備して集合したのであった。主謀者は誰で何んの目的で集合したのかは、私には解らないが、此の時の写真が当時の有名な週刊誌オ・クルゼーロの表紙を飾って紹介されたのであった。

剣付銃が三丁宛組立てられて列をなしていた。全く日本軍の一個小隊が忽然としてチバヂー河畔に現れたのである。

あの週刊誌が市販されていて、あの時期に警察が見逃す筈はなかろうと思う。

それを何故雑誌社の手に入る様な事にしたのであろうか、それは一味の油断か、或いは裏切り者がいたのかも知れない。

又、ブラジル語の読めない私が、あの週刊誌を見て何かを誤解しているのかも知れない。

然し此の時の週刊誌が発売されて余り間を置かずに、ロンドリーナ地方の勝ち組の人々が、相当数逮捕される事になり、いまわしい他地方の様な暗殺事件は未然に防がれた

と考えたい。
いわゆるパラナに於ける前衛隊事件である。
後で判った事であるが、此の前衛隊の逮捕については、０氏の行動も考える必要がある様だ。
０氏は同航者のＡと親しく交際していた。その頃Ａ氏が０家を尋ねると、その度毎にこぼすのに、
「此の頃隣りの家でどうしてかピストルのケイコ打ちが始まって、パン、パンと相当数撃たれる。
それも日曜や休みの日だけでなく週日にもされるので、土地の境い近くの仕事をするのに流れ弾が恐くて仕方がない。その隣というのは勝ち組で話し合いがしにくいので困っている」
という事であった。
Ａはその度に、けがをしない様にと注意していた。と或る日突然前衛隊事件として、勝組の人達二十数名が、警察の手入れに遭い逮捕される事になって、世間の人は驚いたのである。
それから何年か過ぎてから、０氏はＡに、あの時は思案の末、私が警察に連絡すると、まず隣りに手入れがあり、どうもその時、負け組、当時は認識派とも呼ばれていた。この人達の暗殺リストが見つかったらしく、それで二十数名がバタバタと捕る事になったのだという。
私は前衛隊など聞いた事もない団体の此の事件が、０氏の訴えに依るものか，前に紹介したチバヂー河畔の軍事教練に依るものか解らないのであるが、いづれにしても此の

事件のおかげであろうか、パラナ州ではテロ事件は起こらなかったのである。

逮捕された前衛隊員は何年間か刑務所生活で大変苦労された様であるが、テロ事件を起こしていない事は本人たちにも、又認識派の人達にも幸いであった事を知らなければならない。

第三話　機関誌

一九三八年（昭和十三年）末に日本語学校禁止令が出て、私共のロンドリーナ郊外の中央区では、新築間も無い木の香も楽しい学校が閉鎖されてしまった。

植民者はみんなヤシの丸太小屋に暮していて、製材の家を立てた人は植民地に一、二軒ではなかったかと思う時代に、子供た

ちの為と六ｍＸ三十ｍの校舎の三十ｍの側に二ｍの廊下を端から端までつけ、教室は六ｍＸ六ｍを四つ作り、その一つを教材の置場と教員室とし、更に台所を作ってあった。

廊下は裏側に有って入口はなかば頃に玄関を造り、玄関から入ると三ｍの廊下があって裏側へ突き通り、裏側の廊下を通ってそれぞれの教室へ入る様になっていた。

此の立派な学校が建って一年そこそこで閉鎖されたのであるから、植民者たちにして見れば泣くにも泣けない情ない状態であった。

学校がとざされ、巡回教授も順調に出来なくなって来ると、少しでも勉強をという事で青年会で機関紙を出そう。作文から俳句、川柳何んでも出してもらって勉強の足しにしようという事になり、謄写版ずりの機関紙を発行した。謄写版は学校に有って、巡回教授をしていた先生が書いてくれたと思うのである。

機関誌の名前は、青年会の役員の間で相談するも決まらず、私の提案で『私たちの影』という名前で発刊して各植民者に配布した。それは一九四二年半頃の事であったと思う。

二、三回発行すると、日会の教育委員長から呼び付けられたので、私と会長の本多昌勝君と二人で何事かと委員長宅を尋ねると、「機関誌の『私たちの影』という名が悪い。影とは表に比べて何か悪い感じを与える。どうして影という字を使ったか……」という詰問であった。

名付した私には何の事もない話で、
「それは私が小学校に在学中のある夏休みに幾つかの作文が溜まったので、『私の影』と題をつけて、とじて提出すると先生が喜んでほめてくれた事があったので、今度の機関誌に、私達や通学の出来なくなった少年少女たちの勉強の影が写し出されるので、『私たちの影』とした事でした。若し父兄の方々の気にさわるようでしたら改めましょう」
と言うと、「そういう考えからであれば改名しなくてもよろしい」と、お許しがあった。
何でもないような事でも、父兄は後輩のする事に気を配っていてくれたのである。
間もなく正月が近づいて来て新年号を出そう、それには町の商人から広告を集めて資金を少し作る事にしようという事になって二十店位の広告を取って来た。
私にはこの広告集めに歩いた覚えはないのであるが、確かに集めて来た事は、その広告が前代末聞の謄写版のカラー印刷だったので町に配ると、何とこれは二重刷りぢゃないかと誉められた覚えがある。
尚その後、即ち四十一年の九月頃迄は確実に発行されていたのであるが、その内に私はフレーザ植民地に移転したので中央区の機関誌の最後は判らない。
フレーザに来ると戦争に入っていたのであるが、此の植民地でも機関誌が発行された。長くは続かなかったが、それでも一ヶ年半位は出ていたと思う。
浜本氏の娘さんきょうだいが、良く俳句や短文を投書し

ていたが、結局原稿不足で間もなく廃刊になった。
此の事を覚えているかと大久保昭二君に尋ねてみると、思い出してくれた。
それは機関誌という様なものではなく、唯のカデルノ（ノート）に、思い思いの事、俳句でも、作文でも、日記でも、なんでも良いから一週間の内に書いて次に廻す事にして始めた。そのカデルノには、『回覧日誌』と名前が付いていたと言われる。
学校が閉鎖されてから、何とか、何かをと暗中模索をしたのであるが、学校程成績をあげるものはないのであった。

第四話
北パラナの勝ち組

勝ち組、負け組の問題は終戦後の事で、戦争の影響でコロニア（日系移民の社会）に嫌な事が起きたのは、終戦前であった。
その大いなるものは生糸と薄荷（はっか）の暴騰である。結局は何に使用されたか解らないのであるが、この異常な値上りは唯事ではない。絹はパラシュートに使われるに違いない。ハッカも何か戦争に欠かせない事に使用されるので、此のベラボーな値段が払われるのだ。此の様な利

敵産業に従事する事は売国行為だ、養蚕小屋を焼き払え、新しく植える苗は抜いてしまえ、ハッカの蒸溜小屋も焼き払えという理論で、焼き討ち事件が起きたのである。

実際にそう思った熱血漢も居たであろうし、仕事に乗りおくれて他人の儲けをねたんで、火付けに廻った者もいたのではないかとも噂されていた。

然しこの焼き打ちや新しく植えた桑の苗抜き事件は、ロンドリーナ以西のいわゆる北パラナ国際植民地では、養蚕もハッカ作りも殆んど入っていなくて起る素地がなく、パラナと言ってもサンパウロ州との境い地方であったらしい。私たちは噂を聞いた位の事であったが、現地では相当激しかった様である。

日本人の会合では、アサイでは、天長節という事で十数人集まって飲んでいた処へ警察が入って来て一網打尽に捕まってクリチーバ迄連れて行かれて年余の留置場生活をした人達がいたらしいが、ロンドリーナでは、五、六人集まって飲んでいて捕まったという様な事は聞かなかった。

バストスの溝部氏の暗殺を始め、サンパウロ市内の野村忠三郎氏を始め、脇山甚作元大佐などの殺害事件を聞いて冷汗をかく思いはしたか、此方では幸いに人に傷を負わす様な事件の起きなかった事は幸いであった。

先きに軍事教練の項で書いて置いた事であるが、前衛隊事件は、若しあの時警察の手入れが少し遅れていたら大事件になっていたと言う噂が有った。

その時、飛んだ噂とは、上層部の命令が下った時には、

誰は誰を暗殺するという名簿が見つかったとの事で有ったが、事実を確かめた人を聞いた事がない。
誰かのデタラメの噂であったかも知れないと思われるのは、若し事実であれば警察から目標にされた本人達に注意があったろうし、そうであればどこからか少しは洩れて来るだろうに、目標にされたらしい人の名は一人も出て来なかった。
又、他の地方では日本の負けた事を良い事に、警察官が日本人の家に出かけて悪さをしたと言う噂は飛んだが、金品を取って行くとか、体に危害を加えるいう様な事の殆ど聞かなかったのは幸いであった。
私の家では猟銃を持っていたので、充分に油を塗って包装して枯れかかったバナナの株の中にかくして置いた。
いかにバナナの枯葉を沢山かけて有ったとはいえ、表の事であるから雨ざらしではと心配したが、油を充分に塗って有ったので少しもサビる事なく元のままであって喜んだのであるが、その為に後日驚かされる事が起るのであった。この事件は何冊目かに書いて置いたと恩う。事件と言っても、驚いただけで人命には影響はなかった。

話が横道にそれそうなので、ここで打ち切る事にするが、北パラナ、特に国際植民地と言われていた地方からマリンガー方面にかけての戦後の勝組の行動では、これと言って世間に迷惑をかける事はなかったと思う。
かえって勝組の人は戦勝ニュースに踊らされて、自分の

仕事に力が入らず、自分の家族に与えた損害の方が、はるかに大きかったと思われるのである。

第五話
消えた剣道大会

一九三八年（昭和十三年）には日本語学校の禁止令が出たらしいが、此の年の九月には第二回全伯雄弁大会がサンパウロ市で開かれているし、日語新開の発行中止などは開戦直前の事であった様で、私が思い出す、此の剣道大会は戦争に入ってからの様である。

学校は止められたが、子供の教育は廃止するなと方針を改めて、学校に集めていた生徒を、反対に先生が巡回して歩く事にして、各家庭にも回れないので植民地内を何ヶ所かに決めて、数名宛集まって授業を受ける事にした処が多かった。

然し植民地に外人の地主が混ざって居たり、労働者を使用する様になっていたので、その人達からの密告を恐れて長く続かなかった処もあった。

当然日本人の集会もうるさくなって来ていて、植民地の日本人会なども、総会は遠慮して役員会で決議して何んとか連絡はつけていたわけである。

ところがそうした弾圧を受けている或る日、突然近所のN氏から
「信ちゃん、良い話がある。ロンドリーナに居る日本人の某氏の娘さんが、此所の警察に顔が利くので話をしたら、警察の署長が許可をくれるので剣道大会をして見せて欲しいと言うのだが、どうだろう」
と、言う事であった。
それで
「そうは言われても、運動会か何かならともかく、剣道大会では無理と思う。それに中央区の青年では、面をかぶった事の有る者は十名程しか居ないので大会にはならない」
と、断ると、N氏は残念そうに、「警察の署長が見たいというので心配はないと思うがなあー」と、その日はそれで別れた。
数日すると、又、N氏が見えた。私はその頃青年会の副会長をしていた。「……先日の剣道大会の話だがね、何とかならないか、実は某氏の娘さんが、州知事の許可でも取ってくれると言うのだが、どうだろうか……」と、言う事であった。
私は某氏の娘さんの地位を知らないので、唯時節柄不祥事をおこしてはならないと考えるばかりであった。
度々のN氏の依頼なので余り気の進まない事がらであったが、大会を開くとすれば連絡をしなければならない。近くの植民地の青年の幹部の意見を開く為に、会長の本多君

と二人で一応ロンドリーナの町に出て、先ずは斉木運動具店に行った。此の店はセルジッペ街の緒方さんの埋髪店の前で、運動具店と言っても新品より主に修繕をしてくれるのであった。各植民地より主にグローブやボールの修繕を持ってくるので、いつも誰かが出て来ていて、各植民地の情報交換には最適の場所であった。

ここで一区植民地、今のルビアセア、東部植民地、今のフレーザ、それに少し遠いロレーナ植民地に、カフェザール植民地などの誰かが出て来ていてよく出あえるのであった。

その日も誰かと出会い、それに当家の斉木氏を混えての相談になったのであったが、

「時節柄が悪い、今の時節に、警察が許可してくれると言うのにも、何を考えているのか、その下心も解からないから、見合せた方が良い……」

と、言う事に意見は落ち着き、N氏に報告した。

N氏は「警察署長が見たいと希望しているのであるから、心配はないのだが、皆さんが心配されるのであれば仕方がない」と、しぶしぶながらあきらめてもらって、此の剣道大会は実現せずに終ったのである。

私はそれで良かったと思っていた。考え方は大変消極的でもあるが、実行して世間に大変な迷惑をかける様な事にでもなってはと考えたのであった。

然し、私たちの不安に思っていた某氏の娘さんの、警察署や州政府の要人に顔の利く事は相当なものであったらし

い。とは後日の事、人は見かけに依らないものである。

第六話
勝ち組にだまさる

或る日町で０氏に出合った。私が０氏と書いたから、小川さんの事だろう、大谷さんの事かも知れんなどと、勘ぐってもらわない様にして欲しい。私はその人になるべく迷惑のかからないように、差し支えるような話には符合を付けているが、その時なるべくその人の頭字を使わない事にしているので、よろしく願いたい。

さて、町で０氏に出合うと、

「オー、信ちゃん、一寸頼みがあるのだがね、都合が有ってカローサ（荷馬車）を売りたいので、買ってくれないかね、頼むよ」

と言うので、「何を言っているのですか、今からカフェーの収穫が始まるというのに、カローサを売ってどうするつもりかね」と尋ねると、「カフェーの収穫はしていられないのだよ」と、言うので、「それでは土地も売るのかね」と、聞くと、「余り急なので土地は急には売れないので、友達に頼んでおいて、このカローサだけ売って行こう思っているのだよ」と言うので、「何処へ行くのですか」

と、尋ねると、
「それがね、もうすぐ日本艦隊が来て、今度占領した南洋方面に再移住する事になっているんだよ」
と、言われるので、「その話は一寸誰かに聞いたが、少しおかしいですよ、移民の再移住がコソコソと内緒で行われている様な筈はない。必ず半年や一年前に公表されますよ」と、言うと、「まあとにかく帰りに私の家に傍ってくれ……」と、言われるので、それ程の廻り道でもないので傍ることにした。

州道から0氏のカリヤドール（作道）に入って見ると入り口の高い地帯には良く育ったカフェーの木が有り、かなりの一番花の分が真赤に熟していて、中頃からは霜に痛められて若い芽が出ていたが、実はついていなかった。七、八百m程下った処に住宅が有った。住宅の周囲に数十株のバナナが有った。
0氏は既に帰っていて、夫婦で私の来るのを待っていたらしい。家に入ると間もなく夫人が、
「沼田さんにカローサを買って頂くと全部片付くので、いつ出発する事になっても良い事になる。近所の人に頼んでも欲しい人はいるのですが、現金を持っていないのでだめなんです……」
と、言いながら、「本当に家財道具全部売れてしまったのですよ、一寸見て下さい」と言って、部屋の戸を開けて見せたが、そこにはカーマ（ベッド）もコッション（藁フ

トン）もなく、土間に米のワラを敷き、その上によれよれの敷布をしいて寝ているのであった。毛布が一、二枚有った。夫婦に一枚、二人の子供用に一枚有ったのであろう。

台所に廻ると、夫人が言われるのに、セト引きの古い皿にクリエール（サジ）とシーカラ（カフエー用のもの）が、一人に一ケづつ、カデロン（ニユームの鍋）が二つ、三つ、ヤカンが一つで、全く何もないのである。その有る僅かの物が、又、みんなセトのはげた物、ニユームのがたがたにへこんだ物などであるから、いざ出発という時には拾てていくつもりで有ろう。

私はこれが中流の地主の出来る事かと驚いたのであった。

然しこれは実話である。

さて引上げ準備の状態を見せてもらってからカローサの商談になった。O氏は私より十五、六歳年長の上、元陸軍特務曹長に迄なっていた人であったから、話はしにくかったのであるが、折から赤く熟して来ているカフェーの収穫をする準備はする事、決してその収穫前に日本の艦隊が連れにくる様な事になる筈のない事を説明して、カローサは売ってはいけないと、私の考えを話したのであるが、

「十五歳も若い青二才が何を俺に説教するか、俺は特務曹長だぞ、我々は今週中に再移住の最後決定が届けられて、来週はいよいよ出発する事になっているのだ」

と言う事になっていたらしいので、何としてでもカロー

サは売って少しでも小使いは持参したかったのか、しつこく買ってくれと夫婦で頼むのであった。
代金は今日半金、その日は月曜であった。残金は一週間後の日曜に持って来て、カローサを持って帰ってくれ、と言う事で有った。
私にも少しは欲も有った。無理無理に売りたい為に値段が大変に安いので、私は売るなといって買わなくとも、他人に売られたら、大変にもったいない、と考えなおして半金払って買って帰ったのであるが、次の日曜に残金を持って行くと、勝組の言う大本営発表の再移住日の再延期であったのであろう。心替りをしていて馬車の売買は破談にしてくれと頼まれて、大変安く買った物であるから、他人に売るなら五割は高く売れるものであったが、この人の為であるからと、入金だけ返してもらって手ぶらで帰宅したのであった。
当時の勝組の人たちは相当長い間、この様に変更変更のインチキ・ニュースを頼りにしていたのであった。誰が出していたのか罪な事をしていたものである。

第七話

戦時中の燈火

開戦して二年程した頃か、誰かの連絡で闇物だから内緒でと知らせてもらって、石油と、砂糖に麦粉を買った事があった。

然し我が家では別に不自由はしていなかったのであるが、これから不足してくると言われて、買っただけの事であった。

ところが、友人の家に遊びに行くと早廻しに色々の事を取り入れていた。

先ず驚いた事は、一リットル入れの食料油の四角のかんの一面を切り取って、中にローソクを立てて火をつけて白転車の前に取り付けると、前面から入る風は抜けるところが無いので入れず、ローソクの火は消えないといって、青年たちは夜自転車で集まってくるのであった。

早速私もまねをした。家の中の灯火はローソクでは勿体ない高くつくとて、各自の家に養っている豚の油バーニヤ（ラード）を石油替わりにカンテラに使うのであるが、バーニヤはかたまる性質があるので、二段式にして、自分の火で横の方を洛かす工夫がしてあった。

市販されていると教えられて後日買って来てみたが、石油の様ではなく、結局石油にした。それは石油が手に入ったからである。

次に考えられていた事は、当時ボツボツと収穫されていて、産業化されていなかったツンゲ（油桐）の種の殻をむいた白い実を細い針金に二十コ程通して、片方から火を付けると二時間位はもつという事であった。

ツンゲの代用にマモーナの種でも良いという事であった。（マモーナ・ヒマシ油をとる木の実）

早速ツンゲの種を用意して実験してみると、一つの種が燃える時は明るく燃え尽きる頃、消えるかと思う程暗くなってから次のに燃え移るので、やはり一つの代用品であって、石油が有るのでこれも実験してみただけの事であった。

私の家では二年分位の石油を持っていたので、これが無くなってからの事にしようと、石油で通す事が出来たのは幸いであった。

私がこの項を書く事に気がついて当時の人に尋ねると、ツンゲの種を使用したという人は何人もいるので、石油に不自由した人も居たのかと再認識したのである。

ロンドリーナの近郊にいた一日本人が、トラック一台のヤミ石油を抱えて、その売りさばきに困り果てていたという事であったが、そうした人に縁の無い人もいたわけである。

或る日町に所用で出ると、今日は市役所で石油の配給をしていると教えられて、どこかの店で一リットルの空きビンを用意して市役所に行くと、何と数十人、いや百人も並

んでいるので、これはたまらんとそのまま帰って来た事があるが、やはり不自由していた人はいたのである。

今思ってみると、ロンドリーナ地方での戦前の燈火は、始めはメーザの上にカンテラが置かれていて、中にはちょうちん替りに下げて歩く手さげランプが、天井からブラ下げたカギに引っかけられているのであった。

その内に据え置きの大型のカンテラ式であるが、立てに長いホヤがあって芯の上げ、下げが出来るネヂの付いたものが出て来た。一九三〇年代の終り頃になると、ポンプの付いた二〇〇燭とか五〇〇燭とかの明るい物が出て来たが、大変石油を使うので家庭用には一般化しなかった。町で夜もあけている薬局の様な店では使っていた。

結局手さげ用のランプが相当長い間親しまれて、電気に更って行くのであるが、一九六〇年前に電気を入れた植民地は早い方ではなかろうかと思う。

四九年にカフエーの暴騰を見たパラナは、翌五〇年から開拓開拓とカフエー植付けに狂奔するのであるが、五〇年代後半迄に電化された植民地は少ないと思われるのである。

又、その一大原因は州として電力が開発されて居らず、私が五三年にロンドリーナ市内に移ったのであるが、人々がポツポツ就寝する十時頃から、やっと電灯が普通の明るさになるという状態であった。

従って現在の私達はうっかりしていると、幸せ一杯の中

にいて、幸せに気が付かずにいる事になるのである。
その頃、私は電気の商売をしていた西様に五〇〇燭のトランス・フォルマドールを作ってもらって、それを使うと、暗い電気が普通の明るさになるのでうれしかったが、此方が明るくなっただけ、隣りが暗くなった様に思われて気の毒な気持ちになって、二晩か三晩使って外したトランスは今も物置のすみに有る筈である。七、八キロもあるかと思われる重い物であった。
捜して見つかれば移民資料館に陳列の価値があるかも知れない。

第八話
帰国の準備を急ぐ

一九四一年に入ると日米間の雲行きが悪化する。中国大陸の事変も拡大されて、戦争に向かって行く様相がひしひしと感じられたのであるが、私たち青年は日米戦を早く始めて、勝って片付けてくれればいいんだ位に思って、家庭内の話題がそんな方向に向ったある日の事であった。母親に
「戦争はそんなものではない。勝っても負けても大勢の人が犠牲になって、或いは死に、或いは負傷するので、その家庭にすれば大変な事であるから、うっかりした事を

言ってはいかん」
と、注意をされた事があった。
私たちは、戦争の実際を見ていないからその悲惨さには気が付き難いのであった。

然しその事は別として、一九四一年（昭和十六）十二月八日、第二次大戦は始まった。
中国大陸では長期に亘って戦っていたのにそれは事変であって、いよいよ戦争となったら早く片付く様に思っていた。日清戦争、日露戦争なども、実質には一年足らずで終っていたからかも知れない。
ロンドリーナ近郊に入植していたＡ氏、とにかく戦争が始った、急いで土地を売って帰国準備をせねばと、十二月八日に開戦すると月末には所有地を売ってしまった。故郷へ帰っても二万円の現金があれば、当時の日本では銀行利子で楽に暮せるという時代であったから、二万円の上に家族の旅費を上廻る値段で売ったＡ氏は、植民地でトップを切った成功者であったが、戦争が始まっていたので結果に狂いが来るのであった。
同じ植民地に居た０氏は、開戦前の最後かと思われる船に間に合はせて所有地を売って引上げて行ったが、所有地が小さかったので、成功者という帰国になったかどうかは解からない。
そして此の０氏は終戦後再渡航して来ていた事を思えば、苦労しに帰っていた事になるかも知れない。

又、ロンドリーナの市街地に近い処に暮らしていたＳ氏も、次々と不動産を売りながら帰国の準備をしていた。

やがて戦争が二年程した頃か、砂糖、塩、石油、麦粉などが不足勝ちになって来て、三倍位に値上りして驚いたが、いつも買物する店で尋ねるて見ると、少しは準備して置いた方が良かろうと云われて、私も石油十八リットル入り二カンを予備に買ったが、高いと思った記憶がある。砂糖も塩もサッコ（袋）で買って置いたので不自由はしなかったが、ぼつぼつと必需品が不足するかに思われた時、資金を持っているＡ氏やＳ氏は闇屋の話に乗って、トラック一台宛の闇物資を買込んだのであったが、その時が最高値でそれより上がらないのであった。値の動かないのは、儲けにならないと言う事で済んでくれれば良いのであるが、石油のカンがさびて洩れだす、砂糖は中白であるから雨期になると少しとけてくる、麦粉には虫がついてくる、店でないから買いにくる客がいない。結局、何とか片付るのに相当の被害をこうむったらしい。

それでも四年程で戦争は終ったが、予想を裏切った敗戦であった。こんな事になる筈ではなかったと思っている内に、臣道連盟の戦勝ニュースが流れて来ると真先に飛びついて行く事になった。

とにかく、帰国の為に不動産を整理して待っているのであるから無理もない。どうしても勝ってもらわなくてはならないのだ。

処が此の勝ち組の内部が又、精神的に結ばれている同志で資金の無い者は救けてやろうと、有る者が相当に犠牲を払ったらしい。ブラジルを占領に来る日本軍に合流するというので、男性は一同軍装を整えた。軍刀、鉄砲、軍帽、軍服を一式揃えたのであった。銃弾はどの位準備されたのか、それ迄は私には知る事は山来なかったが、銃が相当数準備された事を思うと、弾薬も用意された事と思う。ピストルなども用意されたし、これは相当に練習撃ちされたので解る。

これをロンドリーナの町に近い農家で行ったのは、うかつであった。隣の人に脅威を与え、その方から警察への届け出となって、一網打尽に逮捕される。あの有名なロンドリーナの前衛隊事件となるのであるが、その件は既に説明しておいた。

今日はA氏やS氏が、ブラジル移住に託した希望の成功を達成しながら、急ぎすぎてブラジルにいて、ならなくてもよい戦争の犠牲になって、その失敗を取り戻すのに相当の年数を苦労する事になった事から、当時他にもその様な人がいたかも知れないと思い、此の項を書いたものである。

勝組の助け合いの一つに、同志の一人丁氏のカミニョン（トラック）が使われていたが、少し古くなったので、いよいよ日本軍が来た時に動かない様な事が起きたら困るとて、有志によって立派にレフォルマ（完全修理）された。

アルゲール（運送業）をしていたT氏であったから、噂

では「うまくやったのはTの奴だ」と、言う人も店たが、仲間同志では真剣であったのであろう。

第九話　臣道連盟事件

此の事件は、北パラナ地方ではテロ行為をしなかったので、私には詳しい事は解からないのであるが、今回の八冊

目を「戦争と移民」とした都合上、半由知雄先生の「ブラジル日本移民・日系社会史年表」からの転載で、ご紹介して置く事にしました。日系コロニアの事を大変詳しく調べてあるので有難いです。

では本文に入ります。終戦直後から臣道連盟の流すおかしな戦勝ニュースで、日系社会が大変いやな気分になっていた。終戦翌年の三月七日夜、バストス産業組合専務理事の溝部幾太氏が臣道連盟のテロの凶弾に殺害されたニュースが飛んで来て、一同愕然とした。

それから三カ月ほど後の四月一日、元サンパウロ文教普及会事務長で有名人の野村忠三郎氏が暗殺され、同日同じく襲撃された元アルゼンチン公使の古谷重綱氏は助かった。

それから二ヶ月した六月二日には、元陸軍大佐の脇山甚作氏が暗殺されると、事件はノロエステ線、パウリスタ線に広がり一月余りの間に、傷害六十四件、殺害十二件に及んだという。

七月の三十日にはパウリスタ線のオズワルド・クルース市で、いわゆるオズワルド・クルース事件が発生したのである。　事件は日本人と、ブラジル人のトラックの達転手との口論から、既に起こっていた臣道連盟の負け組に対する家屋破壊や放火事件に、怒りを感じていた一般市民の感情が爆発して、「シンドウを殺せ、日本人をやっつけろ！」の叫びとなり、四日間にも亘る大騒動が起きた。

八月には更にテロ事件十件、四人が殺されたという。
テロ事件の最後は、翌四七年一月六日、サンパウロ市のアクリマソン区で、鈴木正司氏が二人のテロに襲撃されて死亡した。氏は森田芳一氏の義弟で、森田氏はスエーデン領事館内日本人権益部に働いていたので、この人と間違えられて射殺されたとの事であった。
テロ事件は此の事件が最後となって治まった様である。
それまでの事件数は、百件を越え、犠牲者は二十三人が調査されている。
この事件の殆どが、勝ち組による負け組の認識運動者の晴殺事件であり、テロ団は殆ど臣道連盟員であったから、これらの事件は一般に臣道連盟事件と呼ばれた。

然しこうしたテロ事件は、パラナ州では起こす人が居なかったのでパラナ州の人は幸いであった。
後日、ロンドリーナで前衛隊員が逮捕された時、暗殺リストが見つかったので、芋づる式に捕まったとの噂が流れたが、パラナの人には殺人テロにまで出る様な人の居なかったと見るのが正しいと思う。
若し暗殺リストが有ったものとすれば、警察から、そのリストに有った人々に注意報が出されたであろう。そうなると、どこからか幾らかの事が洩れてくる筈であるのに、長い間一言も洩れて来なかったのであるから、当地方には、それまでの過激な人は居なかったと見るべきであろう。

ロンドリーナ地方の前衛隊事件は何時頃の事か、私は覚えていないが、一九五〇年（昭和二十五）三月、飛び魚と呼ばれた水泳チームが来た時、元のパリヤーノ空港で迎えたが、時は既に戦後五ヶ年を経ていたが勝ち組の一団が空港で気焔をあげていた。

そしてその年の十一月末になって、マリリアの警察が帰国サギ団として勝ち組の人をだまして金儲けしていたとして、国民前衛隊隊長、山岸宏副隊長、矢島実以下五十余名を逮捕したとあるから、勝ち組の人々が通常に戻るには随分と年月がかかっていた事になる。

ロンドリーナで前衛隊が逮捕されたのも、マリリア事件と時を同じにしていたかも知れない。

そして此の人達の出獄するのは早い人で一年位で、長い人は数年かかった様であった。

刑務所側では

「あなた達がどう思っていても、日本は負けているので、早く家に帰って、家族とたのしく暮らす様にしなさい……」

と諭してくれるのであるが、此方が

「日本が負ける筈が無い、私達が此処を出る時は、日本軍によって、あなた達と入れ替る事になるので、それまでは出ん」

と、言って頑張っていたのであるから、迷っていると言う事は仕方のないものだ、とは出て来た人の話である。

上の者はだましていたのであるが、下の者は真剣であっ

たのだ。
五〇年はマリリア事件で、前衛隊の頭領が捕まって、五一年も五二年も何事も無く終りそうにしていたが、悪い事をする勝ち組は消滅してはいなかった。
五二年の十月三十日になって、帰国サギ団、国民前衛隊の残党が相当数、サンパウロ市に於いて一斉逮捕されたのである。
それでも戦後は終らず、翌五三年の十月二十一日、桜組挺身隊のサンパウロ市中心街への幡を立てての行進となるのであった。
それで五三年は終り、五四年は明けると間もない正月九日、朝香宮を名乗って巨額の金品を勝ち祖の人々から巻きあげていた、加藤拓治が逮捕された。
五四年はその位で終り、翌五五年四月、加藤拓治のシッチオ・キヨ（聖市郊外に日本引上げをうたい勝ち祖を集めた農場）を脱出した三家族が総領事館に出頭し、内情を暴露し、残存者の救済方を請願したと言う。
又、同じ四月聖市保安局は、サント・アンドレーの勝組集団二百余名の共同生活を強制解散し、一時行き先の無い人々は同市鉄道倉庫内に収容したそうだ。
終戦十周年のこの辺で、勝ち組の事件らしいものは大方終った様である。

第十話　日本戦災同胞救援会

勝ち組が気焔をあげている時、負け組の人は冷静に時局を認識して、敗戦後の物資の極端に不足している母国に救援物資の送れる道をさぐつていたのであるが、これが案外に手間取っていた。

道が開けるのが、終戦の一年半も後の様であるが、その前から臣道連盟によるテロ事件が既に起きていたので、彼らに強い刺激を与えない配慮をしていたのかも知れない。

いずれにせよ、救援は時期を失しては価値なしと決心さ

れたのが、四七年の三月末に、元海興支店長の宮腰千葉太氏宅に、サンパウロの名士二十余名が集まって協議の末“日本戦災同胞政済会”の名称で発会したとの事である。

方法は米国を通じて、日本に不足している食料や衣類を送るという方法で、募金は一般向きに行われ、希望によっては個人向きにも送る事が出来た。個人宛の場合、何種類かあって選ぶことが出来た。

この組織が私共のロンドリーナ市に来たのは、同四七年のなかば過ぎであったろう。そこで何回か市内外の名士によって検討されたらしく、その内に私たちにも伝わって来て、招かれて出席したのはその年も年末に近かったと思う。出席して見ると、邦人第一級の事業家の杵磨宗一、大雑貨商の西岡儀作、プランタ機制作で有名な鉄工場の大屋五郎、シャーカラの名士山下源次、第一区の大原正治、同じく富田正彦氏ら第一級の人物の勢揃いであった。

会場に入って「あらっ、私の様な若造の顔を出す場処ではなかったか」と、思わせられた覚えがある。

それでも翌年一月から僅かばかりではあるが、月掛け醸金をしていたらしく、その時のカルトン（カード）があるので載せて置く。何故同年の物が二枚あるのか覚えはない。又、当時のお金の価値の覚えも無い。

それから十二、三年後に訪日すると、あの時に送った品物で助けられたと喜ばれた。

その時の話の一つに、砂糖が特に有難かった。とにかく

当時砂糖は手に入らないので、貴重品として保存し、ちょっとした子供の病気の時などに、砂糖水を一杯飲ませると、治るというような状態であった等と話していた。

そのブラジルでは戦地にも行かず、戦災にもあわず、家族揃って気楽に暮していたのであるから、何とも申し訳のない気持ちにさせられたものである。

それが今日、その悲惨な苦労をした日本の人々に、又日本の政府に、何かと援助をお願いしている状態なのであるからちょっと情ない。

人間も、国も、時折りは苦難に遭遇してこそ、発展するものであるかも知れないが、私はそれでは情けないと思う。

戦災同胞政援会の件で沖縄県人は別に沖縄県救援会を組織した。

名称はＳｕｂ．Ｃｏｍｉｔｅ　ｄｅ　Ｓｏｃｏｒｒｏ　ａｏ　Ｊａｐａｏ　Ｓｅｃａｏ　Ｏｋｉｎａｗａとあったから、一般の救援会の中に含まれていたのであろう。

上記の会員證のところのカリンボ

SECÇÃO LONDRINA DE PARANÁ

COMITÊ DE SOCORRO DO JAPÃO

AUTORIZADO PELO CRUZ VERMELHA BRASILEIRA FEDERAL

CAIXA POSTAL 35

LONDRINA - PARANÁ

とあるのが原物では良く解る。

ブラジルでは沖縄県の人々は僅かの戸数で、他県人の及ばない団結力を持って活動している姿に習わなければならないものがある。

私は此の一編で、勝ち組のテロ事件が方々でさわがれていた時点で、認識派の人々は、身に危険を感じながらも母国の戦災同胞の救援に活動していた事を知ってもらいたいと思う。

第十一話
戦争当時の記録　ところどころ

私はここで十一話・十二話としてサンパウロ人文科学研究所編の『ブラジル日本移民・目系社会史年表』から興味の有る記事を年代順に並べて、皆さんの参考に供したいと思います。

この本は大変詳しく調べて書いてあるので、皆さんも一冊求めて座右に置かれる様におすすめしたい本です。

◎戦争当時の記録ところどころ

一九三七年末頃

十四歳末満者に外国語教授禁止。

ー外国人入国法第八章第八十五及び第八十七条ー

農村学校の教授はブラジル国語をもっておこない、十四歳未満者に外国語の教授を禁じ、外国語出版物の発行は其筋の許可を要す。

註　（法令は出たがボツボツと続けていた）

一九三八年

十二月二十五日

全日語学校の閉鎖

この日をもってブラジル全国の外国語学校、主として日・独・伊の学校が全面的に閉鎖される。

註（この法令が出てからは、先生の巡回教育も出来なくなった）

一九四〇年

九月

ベルリンで日独伊の三国同盟調印される。

十一月十日

紀元二六〇〇年祭挙行

総領事館では視貿式が挙行され午前九時から在留民約三〇〇人が参加。

一九四一年

七月末

邦字紙停刊

聖州新報廃刊（アジア人はアジアへ帰ろ！の告別の辞あり）。

八月二十九日

二十九、三十、三十一日の三日間全伯野球大会がサンパウロ市サント・アマーロ線カンポ・ベーロ東山球場で開催、戦前最後の大会となる。

八月三十一日

伯刺西爾時報廃刊。この月『本日限り』の社告をあげて停刊。

日本新聞、廃刊。

ブラジル朝日（旧日伯新聞）ポ語だけとなり、十二月下旬停刊を命じられる

十二月八日

太平洋戦争始まる。

一九四二年

一月十九日

サンパウロ州保安局、敵国国民に対する取締令を公布告示。

内容は自国語で記されたものの頒布、公衆の場での自国語の使用、保安局発給の通行許可証（Ｓａｌｖｏ　Ｃｏｎｄｕｃｔｏ）なしの旅行又保安局予告無しの転居等々の禁止。

一月二十九日

国交断絶・在外公館閉鎖。

十五日～二十七日に亘り、リオ・デ・ジャネイロに於いて汎米外相会議開催。アルゼンチンを除く参加十力国が対枢軸国経済断交を決議。ブラジル政府は二十九日、枢軸

国と国交断交。在リオ日本大使館・在サンパウロ総領事館等、在外公館が閉鎖されると共に日独伊三国人に対する取締り強化される。

二月二日

サンパウロ市内の日本人集中地域コンデ・デ・サルゼーダス街界隈から治安上の理由で第一次立ち退き命令発令される。

二月十一日

敵性国資産に対する資産凍結令発令。枢軸国の資産は種々の束縛・制限が加えられることになった。屋外で枢軸国語の使用が禁じられる。

二月十五日

シンガポール、日本軍によって、陥落。

この頃から第五列論が新聞に出はじめる。多くの日本人が『五列部隊』Ｑｕｉｎｔａ　Ｃｏｌｕｎａ　と呼ばれ、スパイ視される。

二月二十六日

ブラジル船舶2隻がドイツ潜水艦に沈められたと新聞報道。

四月十八日

米空軍によって日本初空襲される。移民同胞はこのことを禁止されている日本からの放送を聴取して知ったが、『不可能な現象』として信じなかった。

六月三日

スパイ嫌疑で警察に拘引される邦人が次第に多くなり、

これらの人に対する救済対策、渡辺マルガリーダ夫人を実行委員長とするサンパウロ・カトリック日本人救済会が生まれる。同会は一九五三年五月名称を『救済会』と改める。

六月四日

ミッドウエー海戦はじまる（日本敗戦の序曲）。

七月三日

日本政府代表引き揚げ。

国外退去を命じられた石射猪太郎大使、原馨総領事等日本政府代表、その他北米から　帰国する野村大使・栗栖特派大使など一六〇〇名を乗せた交換船（中立国スウェーデン籍）「グリップスホルム（Ｇｒｉｐｓｈｌｍ）号リオ・デ・ジャネイロ港を出港。以後日本人の権益はスペイン大使館（後にスウエーデン公使館）が代行処理。日本政府代表の引揚げにより取り残された移民の間には棄民意識が顕在化した。

八月十八日

ベレン沖でブラジル商船撃沈されるに及び、ベレン市民はその報復手段として、枢軸国民の家屋を破壊・放火、特に日立ちやすい日系人の被害甚大、政府はこれをきっかけに監視の目的を兼ね、枢軸人を「陸の孤島」日本人移住地「アカラ植民地」（現トメアスー植民地）に隔離収容した。

九月六日

サンパウロ市のコンデ街界隈の日本人家族に対し、

十日間の期限付きで二度目の立退き命令発令され、戦前から続いた日本人集中地コンデ街界隈は消滅。

九月十八日

サンパウロ・スペイン総領事館内に日本人権益部が設けられ森田芳一（後に勝ち組に暗殺の対象の一人となる）その係となる。

一九四三年

この頃より警察へ拘引される者あとを断たず。移民の心理は動揺し、日本軍によるアジア占領地への再移住論が盛んに流布されるようになる。

一方この頃よりハッカ、繭の生産はアメリカに輸出され軍需資材として利用されるものであり、従って日本人にしてこれらの生産に携わるものは利敵行為に繋がる非国民との宣伝が日本人間に密かに流布される。

七月八日

海岸地方に立退き命令。

ブラジル及びアメリカの貨物船5隻がサントス出港後まもなく、ドイツ潜水艦に撃沈されたところから、海岸地方在住枢朝人のスパイ行為による結果と見られ、同地方居住枢軸人に対し二十四時間の期限をもって立避き命令発令される。サンパウロ移民収容所に一旦収容されたこれらの枢軸人は、親戚知人などを頼って各地に落ち延びた。

一九四四年

四月

既成組織を失い、空白となった移民社会には閉鎖された

不安な精神状況の中で種々なデマが発生流布される。その中でハッカ、繭生産は非愛国的敵性産業であるという流言飛語のもとに、移民のハッカ精製工場・養蚕小屋の破壊・焼き打ち事件がこの頃より各地に発生。「天誅組」、「青年愛国達動」と称する秘密組織などがその実行団体と伝えられる。戦後のカチ、マケの相克は既にこの頃より始まった。

九月

多くの移民同胞が次々と警察に拘引される。

一九四五年

五月七日

ナチス・ドイツ降伏。

ドイツの降伏により、この日より枢軸国民は旅行許可証（Ｓａｌｖｏ　Ｃｏｎｄｕｔｏ）の必要無しの旅行可となる。

六月六日

ブラジル政府、日本に宣戦布告。

ヨーロッパには平和が戻り、ブラジル国内でも戦争気分は下火となったが、ブラジル政府は汎アメリカ諸国会議での大陸国間の共同防衛の連帯義務の再確認決定に基づき、日本に対して宣戦を布告。然し、移民同胞はこれを全然知らずに過ごした。

七月二十七日

新聞はこぞってチャーチル英首相、トールマン米大統領、蒋介石中国主席が日本政府に対し、前日ポツダムにお

いて日本国の無条件降伏を勧告した旨を報じる。

八月六日

夕刊にアメリカ軍によるヒロシマへの原爆投下のニュース。翌七日朝刊は一斉に原爆特集。日本からのラジオ・ニュースは「被害日下調査中、新型の爆弾ならん…」と報じたのみ。

八月十日

長崎へも原爆投下の報伝わる。

八月十四日（ブラジル）

日本降伏。

青天のへきれきの如く日本降伏の報、移民社会に伝わる。翌十五日降伏文書はポ語各紙にも掲載されたが、移民同胞間にはこの日既に「降伏はデマニュース。実は日本の大勝利」、の報が流布される。以後日本戦勝のニュースは連日各地に伝わり、多くの移民同胞は日本勝利を信じるに至る。

九月二十三日

カチ組団体活発化

日本戦勝を信じる者ますます多くなり、各地に戦勝団体続々と結成される。中でも戦時中、既に秘密裡に組織を持ち、敵性産業撲滅に暗躍し、終戦直前の七月「臣道連盟」と改名した一団は、この月二十三日本部をサンパウロ市ジャバクアラ区パラカツ街九十八番に堂々と構え、地方に対しても積極的な組織作りに乗り出し、数ヵ月を出ずして家族数二万、総人員十万を擁する一大組織を構成した。こ

の月これらの戦勝を信じる者達は、日本から邦人慰問使節団・軍事使節団を乗せた軍艦がサントスに入港するとのニュースを信じ、歓迎の為各地から日の丸の旗を持って二千余名がサンパウロ市におしかけた。街頭を激しく往来する日本人の異様な動きに驚き、警察当局は治安を理由に、二十六日、日本人同志でこの状態を鎮静するよう警告を発令するに至った。

十月三日

時局認識達動動きだす

リオ在万国赤十字社ブラジル支部を通じ、日本より初めて正式に終戦の詔書及び海外同胞に対する外務大臣メッセージ到着。サンパウロ市在住邦人有力者により、十日、地方から集まった三〇〇名に対し終戦事情を説明。これを機会に時局認識連動を実施することとし、主要邦人集団地を訪ね直接詔書伝達と事情説明を行うこととしたが、時既に遅く地方はほとんどカチ組によって支配されており、これにより敗戦を認めようとする者は無かったばかりでなく、敗戦を口にする者を非愛国者として、その撲滅の為のテロ暗殺事件へとエスカレートしていくこととなった。

沼田　この様に勝ち組の運動が、異常であったので、活発な認識運動はまさつを起こさない為にも、遠慮せざるを得なかったであろう。

第十二話　勝組事件のあらまし

"桜組捨身隊"サンパウロ市内を行進（一九五五）

この記録は全て、サンパウロ人文科学研究所編の『ブラジル日本移民・日系社会史年表』によるものです。ご了承下さい。尚、少々前項の説明と重複するところがありますがこれも御了承下さい。

一九四四（昭和十九）

二月二十三日

トラック島の戦いで日本軍が多大の犠牲を払ったと日本からのラジオ・ニュースが入る。また参謀本部首脳達の更迭が伝えられる。『決戦を前にしての戦略的処置だ』

との説も流れ、移民同胞は皆強がりを言っていたが、何となく日本の前途に不安を感じ出していた。

四月

既成組織を失い、空白となった移民社会には閉鎖された不安な精神的状況の中で種々なデマが発生流布される。その中でハッカ、繭生産は非愛国的利敵産業であるという流言飛語のもとに、移民のハッカ精製・養蚕小屋の破壊・焼き打ち事件がこの頃より　各地に発生。「天諌組」、「青年愛国運動」と称する秘密組織などがその実行団体と伝えられる。戦後のカチ、マケの相克は既にこの頃より始まった。

一九四五年（昭和二十）

ブラジル政府、日本に宣戦布告

ヨーロッパには平和が戻り、ブラジル国内でも戦争気分は下火となったが、ブラジル政府は汎アメリカ諸国会議での大陸国間の共同防衛の連帯義務の再確認決定に基づき、日本に対して宣戦を布告。然し、移民同胞はこれを全然知らずに過ごした。

八月十四日　（ブラジル）

日本降伏。

青天のへきれきの如く日本降伏の報、移民社会に伝わる。翌十五日隆伏文書はポ語各紙にも掲載されたが、移民同胞間にはこの日既に「降伏はデマ・ニュース。実は日本の大勝利」の報が流布される。以後日本戦勝のニュースは連日各地に伝わり、多くの移民同胞は日本勝利を信じる

に至る。

八月十九日

Ｄｉａｒｉｏ ｄｅ Ｓ．Ｐａｕｌｏ紙が日本人商店及びホテルの探訪記事を出す。既に日本大勝利のデマが飛んでいるらしく、皆返事をそらしている。『日本の天皇陛下のおはじめになったことに誤りはありません』と断言するものもあった。

九月二十三日

カチ組団体活発化

日本戦勝を信じる者ますます多くなり、各地に戦勝団体続々と結成される。中でも戦時中、既に秘密裡に組織を持ち、敵性産業撲滅に暗躍し、終戦直前の七月「臣道連盟」と改名した一団は、この月二十三日、本部をサンパウロ市ジャバクアラ区パラカツ街九十八番に堂々と構え、地方に対しても積極的な組織作りに乗り出し、数ヵ月を出ずして家族数二万、総人員十万を擁する一大組織を構成した。この月これらの戦勝を信じる者達は、日本から邦人慰問使節団・軍事使節団を乗せた軍艦がサントスに入港するとのニュースを信じ、歓迎の為各地から日の丸の旗を持って二千余名がサンパウロ市におしかけた。街頭を激しく往来する日本人の異様な動きに驚き、警察当局は治安　を理由に、二十六日、日本人同志でこの状態を鎮静するよう警告を発令するに至った。

十月三日

時局認識運動動きだす

リオ在万国赤十字社ブラジル支部を適じ、日本より初めて正式に終戦の詔書及び海外同胞に対する外務大臣メッセージ到着。サンパウロ市在住邦人有力者により、十日、地方から集まった三〇〇名に対し終戦事情を説明。これを機会に時局認識運動を実施することとし、主要邦人集団地を訪ね直接詔書伝達と事情説明を行うこととしたが、時既に遅く地方はほとんどカチ組によって支配されており、これにより敗戦を認めようとする者は無かったばかりでなく、敗戦を口にする者を非愛国者として、その撲滅の為のテロ暗殺事件へとエスカレートしていくこととなった。

一九四六（昭和二十一）

三月七日

カチ組によるテロ暗殺遂に勃発。

最初の犠牲者として、バストス産業組合専務理事溝部幾太が午後十一時頃、自宅にて暗殺される。

三月十六日

サンパウロ在アメリカ総領事館の斡旋で認識運動有志のところへ日本の新聞七十部が届けられ直ちに各方面に配布。

四月一日

早暁、サンパウロ在住元日伯新聞編集長、元文教普及会事務長野村忠三郎、ジャバクワラの自宅で屋内に侵入したカチ組「臣道連盟」の一団によって射殺される。同日サンパウロ在住終戦事情伝達趣意書署名者の１人、元駐アルゼ

ンチン公使古谷重綱もアクリマソンの自宅で同団の襲撃を受けたが危うく暗殺を免れた。続いて四～五月と地方に於いて敗戦認識連動で同団の襲撃を受けた者達が、各地で連続的に襲撃され垂軽　傷を負うか死亡する者が続出した。

四月十六日

ジアリオ・ダ・ノイテ（サンパウロ市夕刊）紙上に臣道聯盟綱領なるものが発表される。

官腰千葉太（終戦伝達趣意書署名者）を中心とした有志等「情報」を発行。（九月まで継続）、コチア産業組合より「週報」刊行（十二月まで二十号を発行）。これらは中絶している邦字新聞に替わる役目を果したもの。両者とも邦文タイプの印刷で一～三千部程度。尚、認識運動の為各地の個人又は団体の手で出されたパンフレット刊行物　は二十程あった。

五月三十日

吉田茂外相の名で、日本政府から在伯同胞宛の終戦に関する電報と勅語がスウエーデン公使館に届く。

六月二日

夜、終戦伝達趣意吉の署名者の一人、元日伯産業組合中央会理事長兼バストス産業組合理事長の退役軍人脇山甚作、サンパウロ市ボスケ区の自宅で臣道聯盟特攻隊員四名によって殺害される。

六月十五日

蜂谷専一宅でサンパウロ市在住文化人が集まって懇談会を催す。約二十名集合。これが土曜会に発展し又機関誌

「時代」も一九四七一月から出版された。

七月

終戦一年目を迎えようとするこの月、ノロエステ、パウリスタなどサンパウロ奥地の日系集団地にカチ組による傷害・暗殺・爆破事件が疾風のように広がって行った。同月のみで襲撃・傷害六十四、殺害事件は十一件に達した。

七月十九日

カチ組への説得無効

テロ事件発生と同時にブラジルの新開は連日「シンドー」による攻撃・殺害事件を大々的に取り上げて来たが、これを憂慮したマッセード・ソアーレス・サンパウロ執政官は事態の平静化を計ろうと試み、州政庁に狂信的カチ組分子代表五～六〇〇名を各地から招き、各関係者立会いのもとに日本全面降伏の経過を説明。ブラジルの法を守り、秩序と平静をたもち、ブラジル発展の為に生産に励んでもらいたい旨を告げた　が参集者はこれを聞き入れようとはしなかった。ブラジルの日刊紙は激昂しこれをきっかけに二般市民の排日気運は一層高まった。

七月三十日

オズヴアルド・クルース（サンパウロ州パウリスタ線）事件発生一日系人とブラジル人トラック運転手との口喧嘩から運転手が刺殺されるに及び、それまでに既に起こっていた臣道聯盟員によるマケ組に対する家屋爆破、放火事件に怒りを感じていた一般市民の感情はついに爆発し、「シンドーを殺せ、日本人をやっつけろ」の叫びとなり、七

月三十日から八月二日の四日間に渡る騒擾事件となった。

八月

終戦一年目。地方で波乱続き、臣道聯盟特攻隊、決死隊と称する者のマケ組に対するテロ攻撃事件続発。この月事件数は十件、内四人のマケ組の者、殺害される。

八月二十七日

カチ組テロ事件、憲法審議会に反映

ドゥートラが新大統領に選出されるとともに、新憲法制定議会も開催され審議が行われて来たが、時あたかもカチ組によるテロ事件と期を一にしたため反日本移民の空気は日毎に高まり、新憲法の一条に「年齢及び出身地の如何を問わず、日本移民の入国を一切禁止する」の条項を盛り込む議案が提出されており、同日その可否について審議会本会議に於いて激しい論戦が展開された。長時間に渡る論議の上の票決結果は賛成九十九票、反対九十九票であった。議長は反対に一票を入れ同案は危うく否決された。

十月十二日

「サンパウロ新聞」創刊ー新憲法公布により外国語新聞の刊行可能となり、邦字新聞刊行の第一号となる。続いて年内に「南米時事」（十二月二十三日）。「伯刺西爾時報」も復刊。

一九四七　（昭和二十二）

一月一日

時局認識を標榜して「パウリズタ新聞」が刊行され

る。

一月六日

最後のテロ暗殺事件。

前年七～八月の事件多発をピークとして、各地とも治安当局の迫求が厳しくなるとともに、マケ組認識運動者は警察と協力、白警団組織を作り警戒体制を整えて来た為、テロ行為は減少したが、同日サンパウロ市内アクリマソン区で鈴木正司が二人のテロに襲撃され、殺害された。鈴木は森田芳一（スウエーデン領事館日本人権益部員）の義弟で、森田と誤認、射殺されたものであった。

この鈴木殺害を最後にテロ事件は終結したが、この一年、カチ、マケをめぐつて起こされた事件は一〇〇件を超え、内殺害による犠牲者数は二十三人、その殆どはカチ組によるマケ組認識運動者の暗殺事件であった。暗殺テロ団は臣道聯盟員であった者が多かったことから、これらの事件は一般に「臣道聯盟事件」と呼ばれる。

三月二十九日

救援会誕生。有志十八名。元海外興業株式会社支店長官腰千葉太宅に集まって、母国戦災者の救援運動をはじめる為の組織を作ることになった。この会合によって決定したことは、ブラジル赤十字社の許可のもとにリオに本部を置き、サンパウロを支部とする団体「日本戦災同胞政援会」を作ること、この団体の活動によって集まった金で日本へ政援物資を送ることであった。会のブラジル名は《Ｃｏｍｉｔｅ ｄｅ Ｓｏｃｏｒｒｏ ｄａ Ｖｉｔｉｍａ ｄ

a Guerra do Japao》である。

四月十六日

救援会活動開始。

六月十五日

沖縄救援会SubComite de Socorro ao Japao Secao Okinawaが生まれる。本部はRua Ceres21ーS. Paulo.

七月二十七日

ウーゴ・ラッサールHugo Lasalle神父「戦後の日本」という題でサンパウロ市コレジオ・サン・ルイスの講堂で講演。法王庁の命で勝ち組・負け組の争いを調停する使命をおびて来伯。広島原爆の体験を語る。

一九四八（昭和二十三）

無事終る。

一九四九（昭和二十四）

三月十五日

勝組雑誌「輝号」認可登録済となる。この月第一号発行。発行所はピリツーバ街五十八番V. Marianna S. P. 四ヵ年位続く。

六月八日

戦後第一回訪日団出発。太田龍二、森田芳一等総勢八名。

十一月十八日

臣道聯盟関係者一〇〇余名に国外追放令出る(但し

実行されず)。

一九五〇（昭和二十五）

三月四日

日本の水泳チーム　トビ魚来伯

古橋広之進一行の水上選手団着聖。遊佐正憲（監督)、村山修一（主将)、古橋広之進、橋爪四郎、浜口喜博(戦後日伯交流の先駆けとなったものである)。

七月二十七日

日本戦災同胞救済会解散。同時に連絡機関設置を決議。これが文協即ちサンパウロ日本文化協会の前身となる。

十一月二十日

この夜、サンパウロ州マリリア市警察は右翼テロ的組織を持つ帰国サギ団“国民前衛隊”首魁と一味五十余名を逮捕。尚、二十六日はデモ一味数名を捕らえた。

十二月二十九日

勝組をだまして金銭を巻き上げていた“国民前衛隊”の首魁山岸宏伯と副頭目矢島実を、サンパウロ市特高リベイラ捜査課長が訊問。

一九五一（昭和一一十六）

一月

第一回芸能使節団

日伯毎日新聞社招聘の第一回芸能使節団東海林太郎、小唄勝太郎、三味線曲豊吉、浪曲　篠田実父子一行来伯。「コロニアに慰安を与え、非常な好結果を博した」。なお、三

月三日はお別れ公演があった。（サンパウロ市、サンパウロ州奥地、北パラナ迄巡業）。

二月二十八日

戦後初の日本船

待ちに待った初の大阪商船神戸丸サントス入港。コロニアの気分沸く。

一九五一一（昭和二十七）

十月三十日

“国民前衛隊”帰国サギ団の残党をサンパウロ市で一斉逮捕。

一九五三（昭和二十八）

無事。

一九五四（昭和二十九）

一月九日

“朝香宮”を名乗って巨額の金品を一部の勝組邦人から巻き上げていた加藤拓治が今日逐に収監された（サンパウロ市）。

一九五五（昭和三十）

一月

桜組の街頭デモ

一九五三年五月十六日Ｕｌｔｉｍａ　ｈｏｒａ　紙に報道されてコロニアを心配させた勝組集団桜組挺身隊は、サンパウロ市郊外サント・アンドレー市に本拠を構え、集団生活をはじめ、長期の構えでブラジル引揚達動をはじめ

る。

一月十一日、二十七日、二十八日、二月一日とパウリスタ新聞の三面に報道されたが遂に街頭デモ行進を行い、ブラジルの新聞を賑わすことになる。彼らの運動は、三月、四月、五月と続き拘留された幹部八名に対して、五月十四日サンパウロ地方裁判所に於て全員に禁図九ヵ月の判決があったのが九月十五日付けで報道された後は平穏に帰したようである。

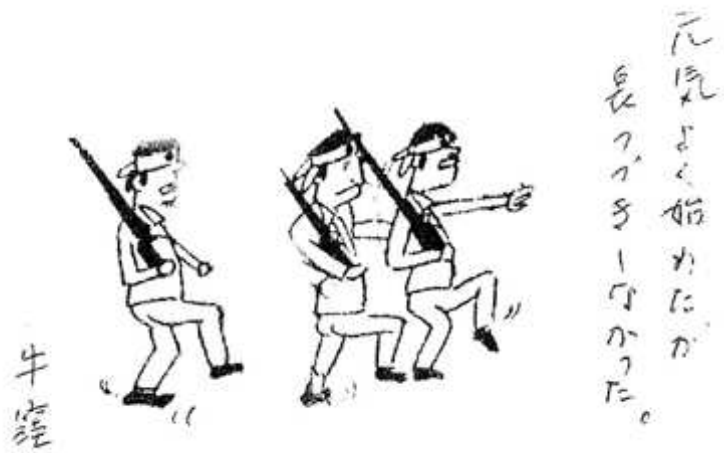
戦後丸十年、これで勝組の動きも静まった。但し勝利の信念に固まった人間がいなくなったのではない。

四月　加藤拓治のシチオ・キヨ　（聖市郊外に日本引揚げをうたい、勝組を集めた農場）を脱出した三家族が総領事館に出頭し、内情を暴露して残存者の救済方を請願。

四月　聖市保安局はサント・アンドレーの勝組集団桜組二〇〇余名の協同生活を強制解散し、同市鉄道倉庫内に収容。

（沼田）　表面に出たもののあらましであるが、それぞれの地方に於いては、臣道連盟からの分派か又個人的なものであったのか、ロンドリーナ地方には堀沢某、川崎某、馬の目某、等々の分子が、勝組として相当長くうごめいていた様であった。従って勝ち組にだまされていた人達は、人生の相当長い間を無駄にしたのであった。

第十三話　夜警団



一九三四年に私たち四家族のセッテ・バーラス組が中央区の一組に入植すると、翌年には残る四家族も皆開拓にかかったので、全く見る聞に人跡未踏の此の地帯も広々とした畠に変わっていったのである。他の組は更に入植が一、二年早いので植民地全体が拓けてきたわけである。

のんびりとした一般外人達とは違って、十年を期限に一儲けして帰国したいという様な希望を持っている者が多く、従って川辺りに住宅地用に少し拓いて、主力はカ

フェーの育つ高い処を開拓して、希望の金の成る木のカフェーを植付けたので、原始林の伐採から、カフェーの植付け等急に仕事が出来、又その植付けられたばかりのカフェーの間に植えられる、いわゆる間作といわれた雑穀類の収入が相当に入ったので、貧乏労働者には仕事が有って良かったのであるが、その内に悪い者が盗みに入ったりする事件が起きてきた。然しこれも、現在にくらべると少なかったのであるが、その内に近くの植民地で強盗が入り、主人が少し抵抗すると、これをピストルで撃つという事件が起きた。

此のニュースが伝えられると、直ちに連合日本人会から役員会が招集されて、再びこうした事件が起きない様にと対策が練られたのである。

警察を頼むにしてもそれは常備に来てくれる状態ではなし、事件後では役に立たない。

結局自分達で何とかしなくてはと、「各植民地で夕方から植民地に入る者を警戒するよりしかたがない」と、言う事になり、それぞれの植民地で青年を主体に夜警団を組織する事になった。

私の家では先年亡くなった兄が出る事になって、私はまだ若いという事で出なかった。

何日か緊張して出かけた兄の話であるが、毎晩二、三人で植民地の入口から二、三百メートル辺りまでを、行ったり来たりしていたが、いつくるか解からない者を相手に待っているのは大変だ。又、待っていても来る者がみんな

悪い者と決まっているわけではなし、通る者を一人一人尋間して、反対に向こうが発砲して、此方が怪我をしたり、命を落したりしたらどうする。

こちらが疑って射殺した場合の責任問題など、夜警が始まってから色々と不安な話題が出て来た。

そこで誰かの考えで、夜警は道に出ないで、少し畠の中の大木の倒れている影にいて、あやしそうな者が通ったら、空に向けて発砲して、警戒している事を知らせる様にしたら良いと言う事になった。

そうして二、三ケ月もした頃から、夜通しの夜警の寝不足では、仕事の方に影響も出てくるものの、事件を起こすかと思われる怪しそうな者の通行も殆ど無いもので、十家族余りの組の自警団など、それ程の青年がいるものでも無く、とても続けられないものである事が解かってきた。

結局各植民地に於いて気負って組織されたのであったが、余り長く続かず、その内に各家庭で花火を準備して危険を感じた時に、窓のスキ間からでも打ち上げる事にしよう。夜の花火であるから良く聞こえるので、聞いた人は少し遠くから威嚇に鉄砲や、更に花火を打ち上げれば近所が統制をとって警戒している事が解かるので、悪い者は退散するであろうと、いう事になって我が区の夜警団は解散した。

その時の花火も、殆ど使う事も無く、長い間泰平に暮らせた事は我が植民地の幸いであった。

いや他の植民地に於いても、強盗らしい者に入られた話

題は少なく、今目の様な治安の悪さは無かったのである。

第十四話
不思議

世の中に化けものとか、不思議という物はないと言う事を聞くが、学問とか、科学的とかの難しい埋論的な事は別として、極く普通の社会的に考えると、一寸不思議だと忠える事は時々あるものだ。

これは一九四四、五年の頃の事であるが、私の家の馬を誰かがいたずらしたのである。

朝起きてパスト（牧場）に行って驚いたのであるが、長く延ばしておいたタテ髪の、あるだけ全部を三本編にして数本垂れ下げてあり、しっぽも完全に三本編にしてあった。更にその終りをキチンと止めてあった。

如何におとなしい馬としても、しっぽをこんなに編みあげたとはよくも蹴られなかったものだと思った。

これは誰か若い者のいたずらに違いないのであるが、若いコローノの青年たちは、パトロンの仕事でなければ、サッシーの仕事で、自分らのいたずらではないと、到々犯人は分からずじまいになった事がある。

サッシーの仕事であろうと言うのは、彼らブラジル人に

はおとぎ話の中に、サッシーと言う一本足の馬乗りの好きないたずら者がいて、夜中にそのようないたずらをする事があると言うのであるが、実在しないのは日本人のカッパの類みたいなものであろう。

翌日ほぐすのに大変な目にあわされた上に、沼田はサッシーの為にヒドイ目に合わされたと、噂を流されて迷惑をした事があった。

又、私が新婚時代の或る時、真夜中を一人で歩いて帰宅を急いでいて、白分の足音に、誰かが後からついて来る様な錯覚を起こして嫌な思いをした事がある。

それでも此の時はすぐに、父が生前、「夜更に一人で淋しい思いで歩いていると、自分の足音が他人の足音の様に聞えてくることがあるから知っておけ」と、言われた事を思い出して安心したのであるが、こうした事とは違って事実として不思議に思わせられているのは、私の健康であった。

私は生れた時、両親は此の子は育たない。冒腸が弱すぎると、何人もの医者に言われたそうである。いつも家伝の胃腸薬を持って来てくれる近所の伊原のおばさんが、私の母に、ある時次の様な話をされていた。それは私の十二、三歳の頃であった。私は物かげにいて聞いたので、二人は私に気がつかなかったのである。

「……あなたも、もう諦めなければ仕方がない。既に十何年と、手の尽くせるだけ尽くしたのであるから、信一が

今死んで行っても、あなたまで体をこわしてはいけない。後に何人も小さい子供がいるのであるから、ここは辛抱して諦めなければいけませんよ」と慰め、力付けているのであった。しかし母には大変であったろうと思われるのは、その四、五年前、私が八歳の時、十八歳の長男を亡くしていたのであった。

その頃、私は近所の病院へ通って、首の廻りに出来ていた淋巴腺腫瘍をX光線で焼いていた。

医者は父に、やっては見るが効果は期待出来ないし、この子の寿命は間もなくだめと宣告されていたのであった。

とに角その頃の私は度々腹痛を起こすのであった。父は富山県出身であったからか、富山の売薬を幾つか常備に置いてあったが、富山の薬より初めに書いた近所の伊原さんが家伝の薬として分けてくれる自家製の薬が、私には良く利くのであった。何でも神社の森の松葉の粉末と、大麦のモヤシの粉を混合したものと言う事であったが利くのである。急激な腹痛を全く良く止めてくれたのは有難かった。

そして十五歳の時、渡伯してきたのであるが、ブラジルの気候が体に良かったのであろう、医者に行く事もなく次第に健康になって、二十三歳で結婚すると、母は妻に信一が嫁を貰う事になるとは思われなかったのに、ブラジルに来てから医者にもかからずに、次第に元気になってくれたと、喜んで話をしてくれたと言う事である。

それが次第に健康になって五十、六十を早々に通り越

し、七十歳も無事に過ぎ、金婚式も終え、今年の七月には早や思いもよらなかった結婚六十年という事になっている。　五十歳代から老眼鏡も不要となって、楽しい日常生活をさせて頂いているのであるが、少年時代の事を思い出しては誠に不思議な人生であったと思うのである。要するに人間の未来とは、予測出来ない変化を来たす事もあるので、常に希望を持っていなければならないものだと思う。

第十五話
つかれる

それは一九五四、五年頃の事であったと思う。
ロンドリーナの中心街で荒義雄君に田合った。久し振りに出合った事で、立ち話ではあったが、今度製薬会社を興こした事、白分の土地の川を利用してプールを作り、それを中心にして遊園地を造成している事などを話されたが、私に株主になる様にとのすすめはなかった。
製薬会社を興こした事は聞いていたので、若しすすめられたら、参加するかしないか考えても置かなければと思い検討した未に、此の製薬会社には参加しない事に決定していた。理由はこの片田舎で製造する薬では、他の製薬会社にたち打ち出来ないだろうというのが、私の結論であった。

ところが、その日はその事に触れずに、
「信ちゃん、私は此の頃気になる事がある。製薬会社もそうだが、私はこの頃川べりに遊園地を造成中なのだが、土方仕事から、石屋のまねをしているので、夜になると相当に疲れるわけだが、「この疲れる」という言葉はどういうところから出来た言葉だろうか」
と、聞くので、「それは何も理屈をつけて考える様なものではないだろう。体でも頭でも適当以上に使った時に起こる現象を『疲れる』と、言う様になったただけの事ではないかね」と、返答すると、彼は
「そうではあるが、私が気になるのは、『疲れる』と、いう言葉を考えてみると“つが枯れる”という事になるが、つとは何の事だろうかと思うんだよ、これが仲々気になって仕方がないんだよ」
と、言うので、
「物事や、言葉はそんな風にこじつけた考え方をしないで、素直に受け止めて置いてはどうかね、そうでなければ、同じ様な解からない事が沢山あって、その度に気になって仕事が手につかない事になりはしないかね」
と返事をして、そこそこに別れたのであった。
帰宅して妻に話をすれば、“おかしな事を考える人だね”と、言う事になって話題とならないままに消えたのであるが、私の頭の中からは容易に消えて行かないで、時々、荒氏が“つが枯れる”などとおかしな事を言っていたがと思い出すのである。

その荒氏の製薬会社は、期待していた高血圧を下げる薬の製造許可の取れる迄のつなぎとして、化粧品や髪につけるポマードなどを製造していた様であったが、そんな物では維持も出来ず閉鎖し、遊園地も衛生許可でつまずいていずれへともなく移って行かれてしまった。

破産をしてみると、やはり相当な人数の人達に迷惑はかかっていて、「私も少し引っかかった」。「私も……」と言う人が出て来たが、私は出資していなかったので責める必要はなかったが、人の金を資本にして仕事を興こすのに、何故もう少し真剣に検討して始めなかったのかと他人事ながら残念に思った。

この荒氏は私と同郷の出身なので、出資はしなかったが、遊園地造成には相当なアレーヤ（川の砂）をチバヂー河畔から、私が買って更に無料で運んであげたので一株、二株持った株主より、私の方が少し多い出資になっていた筈である。同郷の誼みであった。此の荒氏は、北パラナ国際植民地へ日本人として一番早くムダンサ（引っ越し）して来られた家族であった。

北パラナ土地会社としても全く早い視察者で、会社側としても、大切に扱って、その視察の為に馬を貸してくれて何日も何日も土地を見て歩いて二十アルケール（五十町歩）の土地を買ったのであるが、此の土地半分は全くヤセ地であって、その事に付いては入植早々に気がつきながら、良い土地と交換する事も考えず、農家としては近所並

みになれずに終るのであった。
人一倍何かに気の付く能力を持ち、元気な両親に男兄弟四人の働き手で、理想的な開拓向きの家族構成であったが、残念であった。
人みな計画も努力もするものであるが、その結果は神さまの下さるもので幸せは仕事に対する努力に比例するものではないらしいのである。
義雄君が「疲れる」をつかれる、つ枯れると読み替えて気に病んでいたことを時々思い出す。
本人は真面目に考えていたのであろう。

それで此の頃その事を再び思い出しているのである。
それは老齢化した私は度々コブラがえり（カインブラ）を起こすのであるが、それで医師に診ていただくと、体にポターサ（カリ？）が不足しているので、毎日バナナを食べなさい。バナナにはカリ分が多いので良いのですと教えていただいて、毎日食べる様にしているのであるが、それでも度々起こる。これは荒君が気にかけていた様に、私の老齢化でこれが人生の疲れ即ち『つ枯れ』で、科学的にはそれがカリであれ、カルシウムであれ、それが枯れて人生が終るのであろうが、その不足するものをツと表した様に考えるのは、コジツケも過ぎる様だ。

第十六話　無理は一時の得

或る朝隣のＹ氏が来て、私のインプレテーロ（請負師）が境の近い処にあった、私の土地のペローバ（用材に売れる木）の大木、根元の直径ではゆうに一メートルを超える木が、彼の土地に倒れたので片付けてほしい、という事であった。用材に売れるところだけ売って、それから先きの大枝小枝を残されては困る、全部片付けてくれと言われる。出来ない事を知っての無理な話である事はすぐ解る。

それで、「大変迷惑をおかけして申し訳ない事になってしまったが、用材に売れる処はあなたにあげるので、あな

たの方で後の枝片付けもして欲しい」と言って、十余立方米有る大木をあげると、それなら宜しい。枝片付けは、私の方でします」と、言って帰られたが、用材は売って、枝片付けはほったらかしであった。いや大木の枝片付けは出来るものではない。

又、近所の某氏が半アルケール（一町二反程）原始林を伐採した時、その人は隣の畠を買い取る事になった。その土地には、入植して家を建てるつもりで一アルケール位の原始林が伐採されていたので、半アルケールを片付けするのは、一寸重い負担になって来たわけで、私の家に一作だけフェジョン（豆）を植えて取らないか、そうしてくれれば、フェジョンがあるので草の太り方が違うので助かるから、作を取ったら後は除草をしないで畠を返してくれて宜しいという約束で、私達がフェジョンを蒔いて収穫して、畠は返した。

ところがその人は三ヶ月程次の作を植えたくなる迄ほったらかしにしておいて、談判に来られた。収穫をした畠の除草をしてくれなければ困ると言うのである。

父は無埋をいう人にはしかたがない、契約が除草して返す約束なら、収穫した時すぐ除草しておけば、草や木の芽も小さかったものをと不満はあったが、近所同志で喧嘩は出来んと、除草をさせられた事があった。

又一九三六年であったが、棉の収穫が半分程出来た頃、父が組長であったので組内に連絡して、当時の相場として

アローバ（十五キログラム）十二ミルレースで売る人を誘うと、組の大方の人はそれまでに摘んであった分を売る事になったが、某氏は、値上がりすると思うので売らないと言い、その人の小作のＡ氏は売られた。そこでまとまった分を、父が町に出て契約して、空袋を持参し組の入口の本多氏の宅に預けて、各自に取りに行ってもらう事と出荷の日時を連絡して廻った。

ところがである、売らない筈の人の小作のＡ氏が、私の分の空袋をもらいに行くと無かったと言って父へ事情を聞きに来られたのである。父はそんな事は無いはず、あなたの分も確かに持って来てあったが、誰か間違って持って行ったのであろうから、今に出て来るでしょうと話すと、「本多氏はＡ氏の主人が取りに来たので渡したから、その中にＡ氏の分も有るのでしょうと言われた」との事で、解かったのであるが、始めは売らないつもりであった主人は、後に売っておけば良かったと心変わりして、白分の小作者の袋を勝手に横取りしたのであった。後で判明した事は、主人が自分で町に山て相場を調べると少し下がっていて、同じ値段に売れなくて、契約者の袋を横取りした事がわかった。

父は主人のした事であるからと、小作人にがまんしてもらうようお願いしていた。

当時はお互いの収穫が少ないので、何家族かでまとめてトラック一台にしないと運賃が高くつくので、世話をする人がいないとならず、そうすると中に勝手な事をする者が

いて、世話役は嫌な思いをする事があった。

私は老年になって、そんな事を思い出しながら、その事よりも、その当時の人々が、他人に与えた態度から、十数年後のその家族の今日を見て、不思議に一貫するものがあるので、その事を知ってもらいたいと思って書いているものが多いのである。

長い間に僅かの無理な事をして、その場でちょっと儲けても、そんな事は長い間には何の役にも立たず、運命を開かないのである。

それよりは、時々無理な損をかけられても、それに耐えて、他人に迷惑をかけなかった人の方が、その晩年、或いは子孫に運命をひらいている様である。

唯ここで間違いやすい事は、善い行いとは善い事をする事ではなく、善い事をする様に人を育てる事だと言う事を聞いて、まごついている次第である。

第十七話

鯉が釣れた

私が弟二人を連れて分家をして間もない頃であった。母が元気で居たので、一九四三、四年頃の事であったろう。

どうして思いついたのか分からないが、什事に暇が出来たのであろうか、或る日兄弟で釣りに行こうかと言う事になって、家から五百メートル程の処にあるリモエーロという川に出かけた。

植民地の青年たちが時々釣りに行くと話していた川であるが、行ってみると川幅は二メートル程の小川であった。

こんな小さな川にどんな魚がいるのかなと疑問を持ちながら、腐れた木の中にいたカブトムシの幼虫か、魚の餌に良さそうな白い虫を、釣針につけて、川のカーブして流れの静かな所にポトンと落とすと、その瞬間にパクッーと思いがけない大きな魚が喰いついた。小川の釣りなので細い竿であったから、折れそうになったが、何とか引き上げてみると、六、七百グラム位の鯉であったので驚いた。

その後は私にも弟らにも小魚が少し取れただけで、その日は引上げたのであったが、帰宅して大きなバッシーヤ（金たらい）に放して見ると、鯉はまだ生きていて元気であった。

そこで早速綿を出荷する時の大きなサッコ（袋）で網を作って、その日か次の目であったか、又、でかけたので

あった。
川が小さいのに綱が大きいので、川の半分は網がふさぎ、空いている所に、私が立っているので、川をせき止めた様なかっこうで、弟らに少し土流から追わした処が、何と今度は二キロも有る大きな鯉が入ったのであった。
それで此の二匹を十二キロメートル離れた処に居る母や本家の家族に食べてもらいたいと思って、昔父がしたのを見ていたので、早速板クズで簡単な箱を作って青草を敷いて鯉をねかせ、その上を又青草をかぶせてふたを打ちつけたのであるが、その上から十分に水で湿らせて、自転車であったか、馬車であったか忘れたが、母の居る本家の兄の家に急いで届けたのであった。
到着して急いで箱を空けると、鯉はまだ生きていた。
早速、百リットル人るキント（樽）の片側を二十センチ程に切ったタライに、水を張って放すと二匹共に泳いだのであった。大きい方はタライが小さいので尾を曲げていたのを覚えている。
母が、これは川上の誰かの池から大雨の時にでも逃げだした物が、川で成長したのであろうが、今では誰のものとも分からないので御馳走になろうか、それにしても見事な物が取れたものだと、喜んでくれた母もそれから二年程して脳溢血を起こして亡くなったのである。
リモエーラ川の上流には一区植民地の半分があり、フレーザ植民地の大方も有るので、その中の誰かの池の物が逃げ出したのであったろう。

どこでも日本人が何家族か入植すると、良く鯉を飼う人がいたものであったが、池という物はなかなか難しいもので、大雨の増水を防げないものである。
増水の時の逃げ口を作って置いても、時には思いがけない大雨があるもので、畠の水の流れ込まない工夫をしておいても、機械の無い当時の手作業で作ったものは、良く破壊されていたものである。それに作る場所がどうしても谷合いや川べりであるから尚更であった。
それにしてもリモエーラ川の鯉は、あの時母と一緒に食べた二匹の後は、私たちには二度ととれなかった。

第十八話
知らないものは

私達が日常何んの気なしに食べている物でも、先人が初めて食べる様になった時には、何事もなく取り入れられたか、どうかと、考えさせられる物が沢山ある。
色々なキノコを食べているが、このキノコも種類によっては時に毒キノコがあって、下痢を起す位ならまだ良いが命を落とす事が昭和の代になっても耳にしたものである。
毒でないから店で公然と売られ、一般の人が食べている物でも、自分達に食べる習慣のない物は食べられない事が

度々ある。

私達がブラジルに着いた翌日、目的地に行く汽車の中で食べた弁当に、モルタンデーラ（ソーセージ）がはさんであって食べられなく、殆どの人が拾てたが、これと同じ事が、半田知雄氏の著書『移民の生活の歴史』の中にも書かれている。

それが私達の場合、翌年パラナ州に移転したのであったが、一週間程の旅の末、やっとロンドリーナの池田旅館に到着したのは、一般の宿泊客のジャンタ（夕飯）の済んだ後であったが、私達三家族二十名の為に急いでジャンタを作ってくれたのであるが、町に電気の無い時代であるから、生肉などの保存は無く、リングイツサ（腸詰）を油で炒めて出されたのであるが、既に移住一ヶ年しているのに、これが臭くて食べられずに、メーザ（テーブル）の下に捨てると、外から犬が二、三匹入って来ていて、それを取り合いするのであったが、移民が此方の食事に慣れる迄にも、或る程度の期間がかかり、又、その中には、私の父のように此方の食事に慣れずに、不自由した人も居たであろうと思う。

この様においしい他人の食べている物でも、慣れる迄は食べられない物であるが、日本人の場合、昔山で見つけたコンニャク玉を、皮をむくだけでも手がかゆくなってこまるのに、どうしてコンニャクにして食べる事を考えついたのであろうか不思議でならない。芋からコンニャクを作っ

た経験のある人なら、皆そう考えると思う。
どこかに、その事について書いたものがあれば読んでみたいものだ。

さて、ここで本題に入るが、見た事がない、食べた事がないという事では困らされる事がある。
ロンドリーナに来て一年程した頃か、私の家ではせんべい焼をしたら良い日当になると思って、日本の姉に道具を注文すると、すぐに送ってくれた。その包みの中に、ほうれん草の種が入っていて大いに助かったのであるが、同航の大西氏の処へも、日本の親から野菜の種が送られて来て、植えると、始めのうちはレポーリョ（キャベツ）らしい。それにしても少し違うかな、レポーリョの新種であろうと、出来た苗を全部大切に植えると、見事に太ってくれるが、どうもレーポリョとは違うみたいと言う事で、時々、私も見に行った。野菜にしては相当広い畑にみごとに太っているのである。「この野菜何でしょうかね」と、みんな不審に思っている内に、レポーリョのように巻かずに花が出て来たのである。それはコーベ・フロール（カリフラワー、花キャベツ）であった。処が六十余年前の私達は誰もこれを知らないのであるから始末が悪い。
いつ収穫して、どうして食べたらよいのか知らないので、貰った人もどうして食べるものですか」て、聞かれると、「さあー、それが分らないのです」と、言う返事ではどうしょうもない。何百株も有るので売らなければはなら

ないのに売り様がないのである。
日本の親にすれば、西洋から入って来た野菜だから、ブラジルに送ってやれば、少しは収入になると考えての事であったろうが、当時のロンドリーナではどうしょうもなかった。米か豆を植えて置けば、何俵も収穫したのであろう面積が無駄になってしまった。
とにかく知らない物はしかたのないものである。モルタンデーラを汽車の窓から捨てたのと同じで、猫には鰯の方が、小判より良いのと同じである。

第十九話
能　力

人間は一人一人生まれつき違った能力を持って生れている。
七十年も前の事、日本での話であるが、近所に資産家の長田様という家があって、私の父と大変親友であった。
或る日その長田様が、「うちの坊やが、いつも親がやる小使以上の金を持っている。親の金を取ったりはしないと言うが、それではどうしたのか」と聞くと、悪い事はしていないと言うだけで、何をしているか言わないので、私の父に、坊やが何をしているか注意していて欲しいという頼

みであった。
坊やというのは七、八歳で、私より一つ二つ下の子で、長田様の三男であったと思う。
それで私の父も注意していたようであるが、その内に誰が見つけたのか知らないが、坊やは繁華街で商売をしていた。果物の空き箱を三つ四つ並べて、その上に板を置いて古本を売っているのであった。人通りの多い所であるから、結構売れて商売になっているのであった。
親は小使いには不自由させるわけではないので、そんな事をしないでも良いというのであるが、それを止めさせると、何か次の事を考えて、ちゃんと自分の小使いというより、金を溜めることを考えているのであった。小学校の一、二年生の頃なので感心な子だというより、親には少し心配なようであったらしいが、それより四、五年私達の渡伯迄、何んの事もなく、それで学校の余暇は、やはり何か仕事を見つけては働くのであった。
私の父が言うのには、長田様のお父さんも日露戦争に出征中、戦地でいただく手当てを溜めて来て、先祖の立派な墓を建てた人だから、子供もしっかりしているのであろう。将来どんな立派な事業をするようになるか知れんと期待した話をしていたが、残念にも此の坊や名誉の戦死をしていて、再び逢うことは出来なかった。
金満家の家に生まれながら親の財産を当てにしないで、幼年時代から独立自営心の旺盛な坊やの様な人も居れば、四十、五十歳になっていておちついた仕事につけないと、

ピストン出稼ぎを続けている人もいる。
現在の当国の経済状態が悪いから、致し方が無いとはいうものの結婚をしたら、夫婦又家族は出来るだけ一緒に暮らせる方法を考えて努力して貰いたいものと思う。

私たち兄弟が若い頃、カフェー景気にあおられて、本耕地を基盤にして二、三ヶ所に分耕地を開拓したが、分耕地に仕事に出かけても土、日には家族の元に帰って幕らす事としていて、それはそれで良かったのであるが、分耕地へ行くのに道が悪い為に数時間かかるので、大抵弟と出かけ運転を交替で、夜通し走ったものであった。
此の私たち兄弟の仕事振りを見て、「良く頑張っていますね……」と、ほめて下さる人もいたが、或る時、本願寺の近くに住んでいた、今は既に亡くなられた島袋常伸氏に、きつく忠告を受けた事がある。
「あなた方は若いから気がついていない様だから注意して置く。昼と夜は何の為に分かれてあるのか、その位のことは解かるだろう。休む夜の時間を惜しんで働いて、儲けるのは利口な人のすることではない。休む時間は休んで成績をあげる人を、一人前の人と言うのですよ……」
と、言う事であった。
この島袋氏の教訓が、私の人生に相当影響していると思う。
成功はそれ程でなくとも、休む時に体み、家族で楽しむ時には楽しんでの事であれば、人生に悔ゆる事は少ない筈

である。
それにしても能力旺盛な『坊や』に、寿命の無かった事は悔やまれる。

第二十話　大木に挑んで

セッテ・バーラス植民地でも、良く雨が降る処で相当な木も有ったが、パラナの様に立派な材木となるペローバの

様に、直径六十、七十或いは一メートルで、幹が枝迄十五も二十メートルもある様な立派な木は無かった。少し柔らかい木で直径一メートルを超す木も有って、くり抜いてブリキ板を底に張りつけて作った風呂は、ドラム缶よりも楽々と入れたのであったが、柔らかい木であったので、切り倒すにはそれ程の苦労はなかった。

従って北海道札幌市の中央から、直接ブラジル海岸山脈の森林の中に移住したのであるが、ジャングルに挑むとか、開拓の苦闘などという言葉の当てはまる、苦しい思いはなく、明るい希望に燃えていた。それは何故かと言えば、ブラジルの場合、森林を切って焼き払えば、笹の根の様に耕すにしっこいものは一つもなく、焼き跡にそのまま種を蒔けば、米も豆もトウモロコシ、棉などなんでも良く出来たので、次から次と希望がふくらんで開拓は楽しさ一杯で、この項で『大木に挑む』と書いたものの苦しい気持ちはなかったのである。

唯セッテ・バーラスに来てだまされたかと一寸驚いたのは、二、三週程した八月の半ば頃であった。夕方次第に冷えてきて、「寒いなあ、寒いなあ」と、言いつつ土間に火を燃やして暖を取り、早めに寝たのであったが、朝起き出して見ると、表の草の上に白く霜が降っているのであった。

『常夏の国』『冬のない国』と言う宣伝で来たのに、こんなに霜が降る。

その内に雪も降るのではないかと心配させられたが、伐

採の請負師のここに古い人が来て、「たまに霜は降る事は有っても、雪の降る事はない良い処ですよ」と教えられて、こんな霜位で冬が終るなら有難いと思った。

そこで翌年パラナ州のロンドリーナに移転してくると、林相が一変して狭い土地に相当な大木が林立していて、大木に挑む事になった。ペローバ、グワリッター、カブリユーバという木等は、大木があり相当堅い木であった。大木の中にヒゲーラとかパウニア・アーリョなどの様に柔らかい木もあり、面白い木ではジャラカチヤーという直径五、六十センチ有っても、皮を切るだけで倒れる木も有った。木質部は大根と同じ様な柔らかい物である。此の木、現在あると良い値段に売れるので、栽培価値があるかも知れないという事である。

さていよいよ大木に挑むことになった。小さい細い木は全部倒してあるので、否応なしに大木に向かわなければならない。近所には大木だけを請負で切らせる人も居たが、私の家と隣の石川さんでは、自分で倒したのである。

石川さんの家族は二十四歳を末にして三十歳前後の元気な若い人が三人も揃っていた上に、長男が鋸の目立ての上手な人で、大木の倒した仕事の跡、即ち切り株は丸いテーブルの様に美しく切られていたのである。

それに比べて、私たち親子の仕事の跡は、がたがたでかろうじて倒した様子が余りにもはっきりしているので、直接馬鹿にされることはなかったけれども、境界線に近い処

の切り株などは必ず見られているので、私は一人で恥ずかしい思いをしていた。

とにかく、良い鋸がない、目立てが出来ない、此方には鋸の目立て職人が居ないのである。

それで仕方がないので、木の傾いている方を始めに三分の一程切り込むのであるが、これを受けを切るとか、腹を切っておくとか云ったものである。次に背になる部分を鋸で切りたいのであるが、大木で鋸を左右から替り番に引いても無埋と思う時には、大木の両側をマサカリで切り落して、鋸を入れる処を狭くして、後に背から鋸を入れて切ったので、力の無い者がかろうじて倒した事が、全く歴然としていたのである。何もお隣りの石川さんで無くとも、デルーバ・マット（伐採）を請負ったりしていた外人たちが見ても、何と下手な切り方と思うのは当たり前である。大きな外人達が二人で向い合って切るなら、直径一・五～二メートルあってもマッシヤード（斧）で切れるのであるが、背の低い日本人では腕も短かく、とても切れなかったので、仕方なく四方から攻めて、やっと倒したのであった。

こうして相当な数の大木に挑戦して苦労した筈なのに、苦労した思い出が少ないのは、そうして開拓した土地が殆ど自分の土地であったので、植えた物が良く出来て、仲買人も沢山いたが、経済的に苦しめられる事が無かったからかも知れない。

北パラナは地力が良くて幸せな植民地であった。

第二十一話

農　薬

日本から直接セッテ・バーラス植民地へ入植して、短期間に拓いた畠であるから、二アルケール（四町八反）余の狭い畠であったが、全面積に米を植えたのである。十月末から十一月に種を蒔いて、四月から五月中旬にかけて収穫した。

二月の末頃どこからかニュースが入ったのか、十五、六キロ離れた地方に稲に尺取虫が発生して、ひどい所では全滅だという話が伝わって来て、驚いて畠を廻ってみたが、稲は順調に成育していて、早いのはボツボツ穂を出しているが、虫は見つからないので安心していたが、それから間もなくの事、マット（森林）に食用のパルミット（椰子の芯で食料）を取ってくるようにとの事で出かけると、隣の土地と境の朝日の当らない処の稲の葉に、鉛筆の太さ位の尺取虫が何匹かいたので、驚いて帰って親に報告すると、「そうか、行って見よう」という事で、家族でそれぞれバケツとか何か入れ物を持って出かけて捕らえて土に埋めたのであったが、ほんの一部の事であったし、稲は大方穂を出して来ていたので、父は「この見残しの虫の卵が孵る迄には、米の方が収穫できる様になっているのではないかと思うが、古い人達に聞いてくる」と、言って出かけた。

帰って来ての話では、毒は粉の薬で手に入るが道具がないので、それぞれ木綿の袋に入れて片手でその袋を持ち、別の片手に棒を持ってたたきながら虫にかけて歩くので、なかなか大変な仕事の様であったが、古い地帯は、虫が一周りも二周りも早く発生したので大損害を受けていたが、出穂になった処へぼつぼつ見える位なら大丈夫であろうとの話であった。と、言う事で消毒の用意をせずにいたが、忽ちに穂も色付き収穫となったので、虫の事は気にならずに済んだ。然し今考えて見ると、どんなベネーノ（消毒薬）であったのか知らないが、片手に持って、ほか手に持った棒でたたいて散布していたとは、危険な事をしていたものである。全てのものの始めはそんな事であるろうか。

さてこのアロース（米）の収穫を済ますと、十キロ程離れた処で商売をしていたアゲミ商店に全てを買ってもらうと、十五、六頭の馬を連れてきて、その馬の両側にかごをぶら下げて、片側に半俵ずつのサッコ（袋）を入れて運んで行った。

収穫を済ますと急いでパラナ州のロンドリーナへ移転して、初年度は先ず食料の確保が急務と、米を九〇％も蒔いた。稲キビも植えた、昔々の桃太郎の話に出てくるキビダンゴの材料であったかも知れない、少しは餅にして食べた。アロースの間切れした処へ、どうして入手したのか粟を植えると、これも良く出来たが、アロースの収穫が豊作だったので、これは鶏の餌にして試食しなかった。蕎麦も

植えると良く出来て、町で殻をむいてもらってソバやダンゴにして食べた。小豆も良く出来たが、買手が無くほとんど拾ててしまった。

然しこの様に多種類の穀物を植える事は、知らない他国で食糧不足に陥ちてはならないという、親の考えであったろうと思う。

さてその翌年からは、換金作物として、綿を作る方が得策と、隣近所の大方の人が綿を主作にする様になり、消毒をしなければならない事となった。

ところが当時ベネーノ（農薬）に対する知識が浅く、十八リットル入る背負い式の上、手動式で、ガタガタと動かしている内に、よく漏り出すし、又、大きな木をまたいでいる時にフタが外れて、肩から農薬をかぶる事も度々あった。知らないとは言え、全く無茶な事をしていたものである。然し、パラナの場合主作のカフェーが四、五年の内に成長して良い収入となって来たので、綿作りの時代は短期であったから、健康を害する事は殆ど無かったのは幸いであった。今あの時の事を思い出すと、身ぶるいがするのである。

知らないという事は恐ろしいものである。

註＝カフェーの育たない低い地帯を所有して、長期に亘って綿作をした人では農薬の為に健康を害した人も出たのは当然である。

第二十二話

隊　商

隊商については、少年時代、雑誌や映画で時々見ていた。

エジプトからアラビア、今でもよくもめているイスラエル、パレスチナからイラン、イラク辺をラクダに荷物を積んで、隊をなして商売をして歩いていたらしいが、中央アジアに入ってくると、ラクダに代わってというか、混じってというか、馬も使う様になっていた様な映画を見たような気がするが、実際を見た事はない。

私は北海道で生まれてブラジルへ来たので、朝鮮も満州へも行った事はないのである。それがブラジルに来て間もなく、何十頭かの馬の背に変なクラを置いて、それにかける様にして馬の両側に大きな竹カゴを一ケ宛かつがせ、その中にパラナピアカーバの海岸山脈の上、カッポン・ボニートかイタペチニンガ辺の商人が、山脈の麓から海岸にかけての町々へ、物売りに来たのである。海岸のイグアッペからカナネイア辺り迄行くと、有に二百キロメートルを超える事になろう。

馬は北海道の馬に比べると、全く小さいのに大きなカゴを両側にかつがせるので、かわいそうに思われるが、後にこの小型の馬の方が強いのだと教えられたが、それにして

もちょっと小さすぎると思った。時にはその馬に、二メートルもある様な大男が乗っている事もあったが、足が地面に引きずりそうなかっこうは、この小型の馬の方が強いといっても、渡伯前後の私たちには馬がかわいそうに思えてしかたがなかった。

先頭の馬に鈴を付けてチリン・チリンと鳴らしながら行けば、残りの馬がボツボツと後ろから一列縦隊について行くのであった。二列になって歩けるのは、私の土地に届いてからの事であるが、道が広くなっても馬の両側に大きなカゴをぶら下げているからか、二列にはならなかった。

私の土地に出るまでは、全く原始林の中の獣道の様な道で、道には一つの橋もなかったとの事である。尚、現在でもサンミゲール・アルカンジョから少し下ると、車の通れる土道はついているが、マンパウロというビーラ（村）の四キロ程手前迄は、昔ながらの原始林である。いわゆる官有林で保存している様である。

そして最初に出合う畠は、此の私が昭和八年に親と共に入植して開拓した畠なのである。

私たちが一番奥の土地に入ったので、それより奥に農家はなく、此の道を通るのは、チリン・チリンと鈴を鳴らしながら何十頭かの馬で来る隊商位のものであった。

此方も珍しいので手を休めて見ていると、時には「靴はいらないか」と、いって見せてくれた。その時の隊商は靴、それも両側にゴムの入った労働靴ばかり、何百足かを持ってきているという事であった。

私たちは日本から地下タビといって仕事に都合の良い、案外丈夫な靴更りの物を、沢山持参しているので靴を買う必要はなかった。

此の隊商は一週間か十日もすると帰って行くのであるが、帰りの荷として一巻二、三十キロの縄タバコを馬にかつがせてあるカゴの中に入れて、いわゆる往復商売をしているのであった。

チリン・チリンと鈴を鳴らしながら密林の中に消えて行く隊商を見送りながら、この山脈の上にも人は暮らしているのだ。どんな町があるのかと想像をめぐらせたが、実際に尋ねて見たのは、随分と後のことであったし、その昔隊商に歩いていた人達を捜してみる事もなかった。

私たちのマンパウロ滞在は、十ヶ月余りの短い期間ではあったが、その間に二、三回往復していた事を思うと、案外に良い商売になっていたのかも知れない。

隊商とは砂漠とつきものの様に思っていたが、道路、鉄道、車等に不自由していた時代では、或る程度の距離をへだてて相当な人口があれば、その地方によって『ラクダ』であったり、馬を利用したりして商売をする為に考えられたのである。

今思い出しながら、此の文を書いていると、チリン・チリンとあの時の鈴の音がなつかしく聞こえるような気がするのである。

第二十三話

昔の訪日

日本帰りも船の時代から飛行機の時代へと、大変な変り様であるが、時代の移り変りが船から航空機に変ったという事と、更に日本の人手不足から出稼ぎがブームになって、同じ日本へ行くのにも、その感激の度合に大きな差があると思うのである。

私は渡伯後、二十七年振りに一九六〇年大阪商船の春の観光団に参加して訪日した。

此の頃出稼ぎに行く人等、今夜の便で訪日するとて、ロンドリーナをお昼頃の便で出かける人が多いが、船便の頃は、そんな事は出来なかった。ロンドリーナからは飛行便で出たが、旅行社が十日前にはサンパウロに出て来ないと、手続きが出来ないというのであった。なる程私の手続きは、十五日目の土曜日の十二時に出来上がらず、旅行社の社員と警察を廻っていたが、社員が「お客様、すみませんがお客様は此の船に乗れません」という始末であった。一時を過ぎてから警察の中へ無理に入り込んで署長を捜し出し、泣き落としで出国許可を貰い、ドクメント（鑑識手帳）の不備の点は、帰国後直ちに出頭して訂正するという事にして、その夜サントスに下って、翌日の乗船となったのであった。

警察を出る時、旅行社の社員が、「お客さんは言葉が良

く出来ないのに度胸がいいですね、私はだめかと思っていました」と言われたが、全く間一髪であった。

それにしても訪日客を十日も、早い人は二週間も前からサンパウロへ呼んで、その滞在費であるが、それは旅行社持ちであった。

私たちは旅行社の主人の住宅がカーザ・ベルデ区にあって、広い屋敷と別棟の家に三部屋かの日本間があって、十数人でお世話になったのであった。大変良いサービスであったので一同で相談して、幾ばくかのお礼を置いた。大変な商売だと思ったが、ここもそうなら他社も大同小異の事はしていた筈である。

さて翌日いよいよ出帆となると、方々から相当の人が集まったので、五色のテープも大変に賑わったのであった。船が岸壁を離れて見送りの人影が見えなくなる頃、初めての感激が来た。二十余年一度は帰りたいと希望していた日本に向って、いよいよ船はブラジルを離れたのだと思うと、その港を眺めて涙がこみあげて来るのであった。

それから五十日の船旅を無事に送って横浜入港となる日、四月初旬のかなり寒い少し雲の多い日であった。船員が「富士山が見えて来ました」と連絡してきたので、我れ先にと甲板にかけあがったのであるが、曇っていて何も見えない。温度は低くぶるぶるとふるえる肌寒い日であった。

しばらくすると船員が来て、あの雲の上側に富士山の頂

上が見えています、と教えてくれるが、仲々に見つからない。その筈である富士山のてっぺんが幅三十センチ、高さ二十センチ位が雲の切れ目に見えるだけである。まだ相当遠くなのであろう、それでも皆んながそれを見つめて動かない。その内に熱いものが胸にこみあげてきて、涙が流れだしてくるのであった。いよいよ生まれ育った日本に帰って来たのだというあの感激、それは船でなければ味わえ難いものの様である。

それも又、しかたのない事である。四十日、五十日という船旅と、二十時間か三十時間の航空便とでは当然な事である。

だからとて再び船で行きたいとは思えないのである。

今日迄生きられた者は幸せである。

又、昔の訪日は、する人が少なかったので、送別会が関係した各会、植民地、親戚と何回も催されたものであるが、今日では殆ど開かれなくなった。

移民した頃は必ず帰ってくると思っていた母国日本が、懐かしい古里が、その内に一度は帰って見たいところに変り、その内に一寸遊びに行ってくるかと観光地並みになり、今ではそれぞれ何人かの身内の埋葬された墓も出来たからか、故郷に帰って「タタミの上で死にたい」という気持ちは無くなってきている。

外国でも住めば都という事であろうか。

それでも久しく帰っていないので、達者の間にもう一度

郷里を見て来るかと思っている此の頃である。
私も早敬老会の表彰組に数えられる八十三歳にもなったのであるから、見たいものは見ておきたいと思う。
それにしても有難いものは、航空機やテレビ、その他の文明・文化の大変な発達する時代まで生きてこれた事である。

第二十四話　アッセルのカンポ地均し

昔話を書くには欠かせないのは、アッセルの町の野球場

の地均しである。
当時私はやっと青年会員になったばかりで、土地の入手やカンポ（運動場）造成の、経済的な事は殆ど分からないのであるが、国際植民地のカンポとして造成するのだという事で、二週間単位で地均しに出かけたのであった。開始は三七年頃であったかと思う。
奨学舎が既に建っていて、舎監として渡部重先生が勤められていた。
大勢集まってくる青年達の食事は、渡部夫人が主になって作って居られた。バタチンニヤ（ジャガイモ）にカルネ（肉）を切り、どんどん煮付けた物が度々であったが、おいしかった覚えがある。
良く顔を出して世話をしていたのは、ロレーナ植民地の小笠原一二三、ローランジャの五十嵐政雄、町の写真業の松尾行蔵君らであった。それに中央区の平田務君、ローランジャの今井次郎君らも世話をしていた様であった。今井君が早くからオートバイで走っていたのは、既にその頃からであったのか、懐かしく思い出す姿である。今のアベニーダ・J・Kから入る道の両側は共にマット（森林）であったかと思う。
さて、地均しであるが、あの広いカンポをエンシャドン（鍬）で起こして、手車で運ぶというのであるから大変である。始めははかどるように見えても、深くなるに従って大変である。
車も下り坂の時は良いが、平らになると押すのも楽でな

い。仕事がはかどらないものだから、中心と思う辺りから平らにして行く方が良いとか、それでは車を平らな処ばかり押すので損だから、中心から掘り出して、その土を一番深い処へ持って行けば、車は自然に転がって行くと言い出す人が居たが、やって見ると初めの内は良いが、埋め立てが何メートルも有るので、その高さに持ちあげるのが大変であり、又車が急坂では、走り過ぎて掴んでおれず、走るにまかせて手から放すと途中でひっくり返ったり、車が飛んで行って早くいたんだりして、仲々思う様にいかないのであった。

それでも入れ替り、立ち替りの人海戦術で、ロンドリーナ周辺から、遠くマリアルバ地方迄協力していただいたので次第に仕事も進み、一九四〇年七月の国際植民地入植十周年記念祭が、このカンポで挙行されたのであった。

土俵を作って角力大会と舞台を作って幾つかの芝居が演じられて賑わった。

傑作は角力大会の行司に一区から宝田氏が、袴に軍配うちわを持っての正式な姿で出馬した。

その後あの姿は再び見る事はなかった。

宝田氏には移住後最初で最後の晴れ舞台であったかも知れない。又、軍配うちわは黒塗りと思っていたのに、宝田氏の軍配はベルニース（ニス）仕上げで、私には珍しかった。

さて、再びカンポに戻るが、十周年祭にはまだ角に深い

穴が有ったのであるが、祭典後、此の深い穴は手車では大変と、市かどこかのトラットール（トラクター）で埋める事が考えられた様であった。その頃にはボツボツと大型のトラットールが入って来たのかも知れない。それにしてもあの傾斜地の地均しを、殆ど人力で作り上げた事は、あの時代でなければ出来ない事である。果して延べ何千人の力で出来たのであろうか、どこかに記録が有るかも知れない。記録が無くとも土の量から計算すれば、ある程度の事は解かる筈である。

ともあれ今日では想像もつかない力が結集されたものであった。時代が要求したのか、それとも中心人物の人徳がそうさせたのかも知れない。

とにかく時代というものは有難いものだ、このカンポが出来る頃のオール・パラナ野球大会に、エストッパのカフェー用サッコで作りあげた優勝旗に涙を流し、感激したのであるから夢の様な話である。

註＝エストッパのサッコとは穀物運搬用に出来ていた粗末な麻の袋。

第二十五話　南米への航路

移民の大半の人々は、パナマ運河廻りでは四十五日前後、アフリカ廻りでは二ヶ月前後をかけて渡伯した事を、此の頃来る人々に『ご苦労さんでした』と慰安された。此の頃は航空便で一昼夜か！、昔は長い船の旅で大変であったと、平気で話をしている人が多い。

然し私の母は、少し酔うので寝た切りの日もあったが、

「私達女には大変有難い航海であった。
政府は満州事変から戦争に向かって、財政の苦しい中から旅費は無料の上、一人一人に小使い迄くれての此の旅行、食事はあげ膳すえ膳の上、毎日曜には「汁粉」だ「餅」だとおやつをいただき、土曜毎に映画を見せてくれ、更に演芸会だ赤道祭だ運動会だと慰安行事を考えてくれ、寄港地では観光させてくれた。よく考えればいたれりつくせりの観光旅行で、どうかするとブラジルに到着後には、この様な事はないかも知れない」
と話をしていた事を思い出す。
門司港を出航すると早速玄界灘の荒波に見舞われて、殆どの人が船酔いで寝台から出られない。南支那海に入ると幾分落ちつき、やがて香港に投錨。三大美港のその夜景を瞼に焼き付け、シンガポールに入港すると上陸が許された。一行千三百余名であるから、賑やかなものであった。
私たちは同室の青年五、六名が一団となって町の中心地迄出て見た。夏の暑い昼頃で、道のアスファルトを細い棒で突いて見ると穴があいた、かなり洛けているのである。アスファルトは熱に弱かったのかも知れない。
道べりの屋台でヤシの実に穴をあけて、中の水をうまそうに飲んでいるので、私たちも買ってみたが、うまいとは思えず、道べりで働いている労働者にあげたら喜んで、サンキューと礼を言ってうまそうに飲むのであった。生のパイナップルはうまかった。味見はこの二つであったが、ここで労働者の食事を見たのが忘れられない。竹の皮の様な

物に黄色のごはんの様な物を包んで来たのを開いて、片手で一寸丸めて『ポイ』と口に投げ入れて食べていた。

『一寸ぜいたくだな。玉子ごはんを食べている』と思ったのであったが、今にして考えると、ポレンタ（トウモロコシの粉で作る団子）を更に煮詰めてボロボロにしたものではなかったかと思うのである。それを彼ら労働者は貧しくて手づかみで食べているのであった。

シンガポールを出港すると、船はマラッカ海峡を北上して走るのであるが、この海峡全く鏡の如く、波一つなく静かな航海であったが、二日もかかったのか、その内にインド洋に出る事になった。丁度その時、私は甲板に出て前方を眺めていた。と前方に白い線が見え出し、次第に何本にも増してくるので『いよいよインド洋に出るのだ』、白い物は波である事がわかった。

低い波で静かな海であるが、海峡とは違って船はゆれ出すのであった。

船は一路インドの南端のコロンボ港に向かっているのである。

何日目にコロンボ港に到着したのか覚えはないが、とにかくコロンボ港に錨をおろした。此の港では上陸出来ず、船上より荷物の積み降ろしを見ていたのであるが、船のクレーンを使うのは、現地の黒人の労働者が、船に入ってきて使うのであった。港では象を使って木材を扱っていて珍しく思ったが、如何にインドでも、現在では見られない光景であろう。此処の労働者は、噛みタバコとでも云うの

か、ガムのようにクチャクチャと噛んでいた。噛んでいるから仕事に差し支えない。

次には又、十日程かかったのであろうが、アフリカのモンパサ港に到着した。それからアフリカの東海岸の港を一日、二日の航海で、数ヶ所寄港しながらケープタウンに着くのであるが、このアフリカでのおいしい蜜柑とバナナを安く食べられたのはうれしかった。又、この辺の労働者には、噛みタバコは殆ど見られず、巻タバコを吸っていた。又日本のタバコを欲しがるのであげている人がいた。どこかの港で上陸して数キロの道をタクシーで走ってこじんまりとした町に行った事がある。アフリカにこんな立派な町があるのかと驚いたのであった。

映画館があって、戸口に居た係の人らしい方が入って見て行けと誘うので、一寸入って見たら、ジャツキ・クーガン？　の喜劇を写していた。又町には立派な店で一メートルもある象牙に彫刻した土産物など、陳列してあって珍しかった。

ローレンス・マルケス港であったと思う港で、石炭を積み込んだのであるが、此の石炭かつぎの労働者は奴隷らしく、皮のムチを持った白人に、一寸なまけるとピシャと叩かれるので、船上より見ていてかわいそうであった。ダーバン港では、船から釣りをする人が有り、大エビや三百グラム位の魚が良く釣れて、船員に料理してもらって食べているので、次のケープタウンでは、我々も釣りをしようと準備していると、ケープタウンでは釣りは禁正されている

と達しが出て残念な思いをした。
ダーバンでは暖かく、町を歩いていると、一軒のお菓子並びに雑貨を売る店で、我々一行を見てから主人らしい人が、いそいで一メートル角程の黒板に『この店は日本金で買物出来ます　店主』と、日本語で書いて出したので、ぞろぞろと入ってパンやお菓子類を買った。日本語を書くだけに言葉も通じた。
ケープタウンでは、急にミゾレが降って寒くて寒くて船室から殆ど出なかった。アフリカでこんな寒さにあうとは誰も知らなかった。船員の話では、時には雪も降るとの事であった。ここを出港すると、次はいよいよ大西洋の横断であるが、此の二週間は海は荒れて瀬戸物は殆どこわれてしまう始末。そうなると食事に出る人は極く少なく、殆どの人は枕から頭があがらないのであった。

今六十年前を振り返って見ると、やはりこの二ヶ月の旅は、色々な処を見せていただいた観光旅行であったと、考えた方が良いと思うのである。
今日では願っても出来ない旅行である。

第二十六話

“おとぎ話の国”造り

私のメモでは“一九八九年五月二十一日センターにての夢、朝五時頃”と記してあるので早十二年も前の事ですが、この夢が大変気にかかるので、ここに公表しておこうかと思い立ちました。

センターとは、私の関係する団体が某所に持っている教育施設の事で、私たちが時々集っては教育を受けている所の事であります。

普通見る夢は、目が覚めてから考えてみると、相当はっきりしている様でも途中から辻棲の合わない事になるのが大方であるのに、この夢は大変にはっきりしております。

考えてみれば私の生涯に、唯この夢だけが一千字余りの文にメモされて残っており、この頃再び棚の隅から出てきたので改めて発表する気になったのです。

然しこの夢は今までにも時々思い出されて気にかかってはいたものであります。

それではこれからその夢のなかに入る事に致します。

その時、電話がかかってきた。「私は今某ホテルに泊っている者で、実は北海道の道庁から派遣されて来た者です。

ちょっと沼田さんにお伺いしたい事がありまして、そち

らへ参上致したいのですが、沼田さんのご都合は如何でしょうか」と言う事である。
私には別に差し支えのない時であったので、その旨伝へると、「では、すぐに伺います」という事で応接間をちょっと片付けて待っていると、問も無く四十才余りの如才なさそうな方がやって来た。
応接間に小さな低いテーブルを挟んで腰をかけて妻の出してきたカフェーか、お茶であったか、それを一口飲むと、「早速ですが。」と要件を切り出した。
聞くところによると、私の出身地の札幌市の郊外にある篠路村より、主に満州開拓からの引揚者が十数家族の団体を組んで此方のサバウジャ町の近くに移住して来た。
この人達は揃って相当に借金を残して来ているのにその移住の世話をした市の係官に対して、その後いつの間にか、次第に音信も途切れ、送金もないのでこの移住が失敗しているのか心配の余り、道庁に調査方を依頼した。
丁度その時、中南米のブラジル、ボリビヤ、パラグアイの比較的新らしい移住地の慰問を兼ねた視察に派遣されたこの人が、その人達の現状を視て来る様に指令を受て来たという事である。
それで私に「その人達の事情を何か御存知ではありませんか」と尋ねるのであった。
私は当時何かちょっとその噂を聞いた事はあったが、なんの達絡も無かったのでその内に忘れていた事を話し、「それではサバウジャは数十キロの近い所なので私の車で

案内しましょう」という事になって二人で出かけた。
一時間程でサバウジャ町に到着し、町を歩いている人に尋ねると入植地はすぐに解った。
この町の附近は大変砂も多く地味の悪い処であったが、この人達の場合はここからピラポー河に向って数キロ離れていて地味の良い所であった。
現地に着くと新来移民と一目で解る姿の元気の良さそうな人達数名で、植民地への入口の門を面白い形に造っているのであった。
門の脇に出来たばかりのこれも風変りな事務所らしい所に案内されたので中に入ると、今そこで門造りに働いていた人達の中の年長の一人が入って来た。

こちらが相手を新来移民だと一目で解る様に、この人達にも日本の道庁の勤め人、所謂役人だとは一目で解った様子であった。門造りをしている人たちにも到々市役所から借金取りに来たらしいとは気がついた様子であった。
そこで簡単な挨拶が取りかわされると、その年配の相手は今年の会長との事であったが「いやあ日本の方々には長い間御無沙汰をしていて誠に申し訳のない事をしてしまいましたが、この植民地は地味が肥えていたので農産物は良く出来まして、生活は早く安定したのですが、国に残して来た借金の事を考えて心配していました。
生活は安定したとは言ひましても、食べる事に心配が無くなった事で、住宅などは始めにたてた丸太小屋で、暖か

い所ですから良いものの風の吹き通す状態で、何んとか壁だけは板を買って来て打ちつけたいと考えているのです。

然し国に残して来た借金の事を考へて一同で相談したところ、移民の先輩達や、近所の外人等は、新開地へ新開地へと拡張したり、移動したりしているが、私達は本拠をがっちりと此処に決めて、皆んなで協力してこんな事業をおこしては、と意見を出した者がいて、その意見に一同の気持が纏まりました。そこで全村であがる利益を全額注ぎこんだうえ、総動員の取り組みで始めたその仕事が近く完成する運びになりました。

それでこの事務所を造り、入口の門を立てているところです。と言うことであった。

つづく会長さんの話ではこの事業の完成に全力投球していて、日本の方には御無沙汰をし、心配をおかけして誠に申し訳の無い事はしましたが、この事業も完成と言いましても出来上がりという事ではなく、一般に公開して売り出せる迄になったので、これでボツボツと借金の返済も出来ると思います。

先ずこの私たちの仕事を見て下さい。

と言う事になって、お茶を頂いて早速その仕事を見せてもらったのであるが、そこには全く珍しい、“おとぎ話の国”が造られていたのである。

それはなにも、デズニーランドの小型という様なものではない。そうしたものは十数家族の新移民の財力で出来るものではない。

此処には色取りどりの物が沢山並べてあったが良く見ると、すべては幅一メートル程に、長さ四メートル程のコンクリート板の上に造られているのである。そしてその一つ一つが売り物だという。

此方の町の住宅は総べて前面の四、五メートルを庭としてあけておく規定になっていて芝を植えたり、花を植えたりしているが、その手入れに相当苦労をしている。

家を新築した時には庭師に造って頂いても後の手入れが思うようにゆかず、満足出来る状態を保つことは仲々むずかしいものです。

そこで私達は新築している人や、庭の手入れの出来ていない人に売り込みに行き、先づは家族を此処の“おとぎ話の国”へ案内して、良く見て頂いてから好きな物を買ってもらい、それを庭の片側の壁ぎわに掘えて残る場所に芝を植えてあげれば楽しい庭の出来上がりとなります。

後の庭の手入れは芝を刈るだけで庭師などいりません。色がさめれば三年毎位に塗り替えしてあげ、又、子供が大きくなって違った物に替えたい時は好きな物と差額と手間賃を頂いて取り替えてあげるので、お客様には安心で喜んで頂けると思う。

そんな話を聞きながら一廻りすると、かなり広い面積に色々な物が並べてあった。白雪姫と七人の小人の物語の種々の場面から、イソップ物語の諸場面、牛若丸と弁慶の五条橋の戦い、壇の浦の那須の与一の扇の的、大江山の酒

天童子、インジオの色々な生活の場面、今は水に沈んだセッテ・ケーダスの激流、イグアスーの滝、桃太郎の鬼征伐、ブラジル人のお祭り風景等々、有りとあらゆる面白い、或いは美くしい、楽しい場面を、鮮やかな色に塗って仕上げしてあるので全く見事な“おとぎ話の国”である。

此処が開放されると、週末などには大変に見物客で賑うであろうし、それにつれて必ず相当の売り上げがあろう。

私はこれを見て、この人達は珍らしい良い事を思いついたものだ、この仕事はきっと成功すると思った。

調査官もこれで安心して報告が出来るので良かったと思はれた様子であった。作業場に廻ると、粗末なバラッカには壁もない所で、婦人方から子供たちまでが楽しそうに針金を材料にして型を造り、それにセメントを塗り付けて色々な人形などを作っている人、それにペイントで仕上げをしている人等、みんな明るい顔をして器用に働いていたので私もうれしくなって大きな声で「こんにちはー」と挨拶をした。

その自分の声に目がさめて今までの事が総べて夢であった事に気がついて驚いたのであった。

目がさめてから考へさせられる事は、これは全くの夢で札幌市の郊外から、この種の移民の来た例などは唯の一回もないのである。

然し今夢の詮索をしても仕方がない。

唯私はこの夢の中の人達の仕事を事業として考えてみる

と面白いと思い何人かの若い人達に話をしてみたが、興味をみせた人はいないのであるから、事業としては成り立たないのかもしれないが、私には妙に気になるのである。という事は、私には有望だと思われるのである。

若し私が若かったら実行に踏み切っていたかも知れない。

この夢が私の六十九才の時とメモしてある事を思へば、時既に古稀を迎へる者のする事ではないと、その時は思った事であろうが、今目八十才でこの元気でいる事をあの時知る事が出来たら、この仕事をやってみたであろうと思うのである。

この仕事の不安の一つに、創案が尽きたらどうするか、という事もあろうが其の時は案を募集しても解決するであろうし、売れない時はどうするか、との心配は、それ程造れるものではないのでボツボツと出来る物を並べて置けば“おとぎ話の国”が益々賑やかになって、人が集って宣伝になるので心配はないと思う。

それでは思い切って始めてみたらというと、今更八十にもなってあと何年の寿命と恩っているのか、と人に笑われる様な気もする。結局意気地の無い自分である事を知っているのだ。

そこで誰か若い人がやってみてくれたらと思うのであるが、誰もやってくれない。結局は夢物語で事業としては成り立たない仕事なのであろうと、自分の気持ちに決着をつけながら、尚も未練がましく、“然しこの庭が二、三十個

我ロンドリーナ市内に、又私の近所に据えられると、どんな楽しい反響を呼ぶであろうかなどと子供らしい想像が湧いてくるのである。”　結局事業家としての決断力の無い弱い自分に振り廻わされているのである。

後書き

私は十部迄を五ヶ年位で発行したいと思った事もあるのに、昨年はとうとう一冊も出せなかった。

生まれつきの怠慢と、何かにつけて最後のまとまりに決断がつかないので、つい後回しとなっていたが、考えてみれば、これが老齢化なのだと思う。

そう気がついた以上急いで、残りをまとめて出版して行きたいと思います。

ついでに申し上げますと、次号第九部は『風土病と移民』と題して発行する考えです。

職　業　渡伯後一貫して農業

既刊

第一部	カフェーと移民	発行1996年 4月
第二部	ビンガと移民	発行1996年 9月
第三部	毒蛇と移民	発行1997年 3月
第四部	ムダンサと移民	発行1997年10月
第五部	赤土と移民	発行1998年 7月
第六部	ピッショ（砂ノミ）と移民	発行1999年 6月
第七部	霜（ジェアーダ）と移民	発行1999年12月

第八部　戦争と移民

発　行　2001年 5月　初版発行

著　者　沼　田　信　一

SHINICHI NUMATA
Rua Raposo Tavares,828 - Londrina
Est.Paraná - Brasil - Caixa Postal 860
CEP. 86010 - 580 - Tel : (43)322-1740

印　刷　Editora Gráfica Topan-Press Ltda.
Rua Muniz de Souza, 655 - S.Pauio
Tel : (011)279-5522 Fax : (011)277-3975

著　書　沼　田　信　一　略歴

出　生　大正七年（1918）四月十五日
北海道札幌市北二条東一丁目に生る

学　歴　札幌市第一高等小学校卒

渡　伯　昭和八年（1933）7月サントス上陸、アリゾナス丸
直接海外興業株式会社開発のセッテ・バーラス植民地マンバウロ区へ入植、翌年5月パラナ州ロンドリーナ市郊外中央区へ移転、1942年フレーザ区へ移転、1950年ローランジャ郡内へ移転、1953年ロンドリーナ市内に移り今日に至る。